

## 第IV部 関連変数を用いた検討

## 第9章 希望する職種と能力面での特性との関連

### 9-1 本章の目的

キャリア・インサイトではユーザー登録を行う際に、利用者は事務系、営業系、技術系、専門系、製造・現場系という5つの選択肢の中から希望する職種を1つ選択する。第3章で既に見たように、利用者全体の記録を集計してみると、男女別、現在の状況別に見て、「事務系」の希望者が他の職種に比べてとても多いという結果が示された。

職種の希望について5つの選択肢の中から1つを選択するとき、キャリア・インサイトの利用者はどのような観点から希望する職種を選んでいるのだろうか。キャリア・インサイトが設置されている施設にはハローワークや若者向けの相談機関の他、大学なども含まれ、様々な利用者がシステムを使っていることが考えられるが、現在の状況として「その他」という層が多いことから、仕事の経験があったり、就職活動を行っている利用者も多く含まれるだろう。そういった中で、多くの者が「事務職」を選んでいるわけであるが、「事務職」が好きとか「事務職」なら自分の適性が生かせるという理由で「事務職」が選ばれているのか、それとも何か別の基準で選ばれているのか、その点は不明である。また、「事務職」以外の他の職種を選んでいる者についても、選択の理由についてはシステムに残される入力項目からは直接的に知ることができない。

そこで、「利用記録」に残されている利用者の「適性」に関する回答結果を調べて、利用者が選んでいる職種との関連を検討することとした。もしもその職種に対して得意とか興味があるという観点から選んでいるとすれば、適性で示される特性と希望する職種間に何らかの関連がみられるはずである。本章では、職種の特徴と関連づけがしやすい適性として、能力との関連をとりあげ、回答者が選択している職種と測定された能力との間にどのような関連がみられるかを調べることにする。

### 9-2 「回答ログ」における希望する職種に関する再集計

前述の通り、キャリア・インサイトではユーザー登録の際に、事務系、営業系、技術系、専門系、製造・現場系という5つの選択肢の中から希望する職種を1つだけ選択させるが、この回答結果は「利用記録を残す」という事に同意しなくても、「操作ログ」として蓄積される情報となっている。そこで、第3章の利用者の属性においては、「操作ログ」のデータを用いて、利用者全体で希望する職種の状況がどのようになっているかを集計した結果を示した。

他方、本章では、利用者の希望している職種と本人の適性との関連を調べるのが目的であるため、「能力」などの適性のデータと希望する職種との関連を検討するためには、希望する職種と適性に関する回答の両方のデータが必要となる。そこで、本章では適性に関するデ

ータを含む「回答ログ」のデータを使い、分析を行った。分析に際しては、「回答ログ」に残された記録のうち、キャリア・インサイトの正式な対象者である 18-34 歳のデータに絞り、3645 名のデータを対象とした。

(1) 全体、男女別にみた希望する職種の選択者

まず、全体、男女別に 5 つの希望する職種の選択結果を集計したものを図表 9-1 に示す。全体としては、事務系が多くなっており、次に専門系、営業系、技術系、製造・現場系となっている。男性では、事務系が最も多く、営業系、専門系、技術系、製造・現場系となる。他方、女性では、事務系、専門系、営業系、技術系、製造・現場系となる。男性も女性も選択率の高さの順位は同じであるが、男性においては事務系、営業系、専門系にそれほど大きな差がないのに対して、女性では、事務系が圧倒的に多く約 6 割を占め、専門系が約 2 割で、その他はそれぞれ 1 割に満たない。男性に比べて女性は希望する職種が大きく偏っている。

図表 9-1 全体、男女別に見た希望する職種の人数と割合

	全体 (n=3,645)		男 (n=2,135)		女 (n=1,510)	
	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)
事務系	1,568	(43.02)	661	(30.96)	907	(60.07)
技術系	428	(11.74)	331	(15.50)	97	(6.42)
営業系	645	(17.70)	500	(23.42)	145	(9.60)
専門系	741	(20.33)	440	(20.61)	301	(19.93)
製造・現場系	263	(7.22)	203	(9.51)	60	(3.97)
合計	3,645	(100)	2,135	(100)	1,510	(100)

(2) 現在の状況別にみた希望する職種の選択者

次に、現在の状況別に、希望する職種の人数と割合を算出した (図表 9-2)。「学生」では、事務系が最も多く、営業系、専門系、技術系、製造・現場系となっている。「有職者」では、事務系が多く、専門系、営業系、技術系、製造・現場系となっている。「その他」では、事務系が多く、専門系、営業系、技術系、製造・現場系となっている。

図表 9-2 現在の状況別にみた希望する職種の人数と割合

	学生 (n=270)		有職者 (n=767)		その他 (n=2,608)	
	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)
事務系	110	(40.74)	311	(40.55)	1147	(43.98)
技術系	37	(13.70)	108	(14.08)	283	(10.85)
営業系	59	(21.85)	131	(17.08)	455	(17.45)
専門系	52	(19.26)	164	(21.38)	525	(20.13)
製造・現場系	12	(4.44)	53	(6.91)	198	(7.59)
合計	270	(100)	767	(100)	2,608	(100)

どのグループにおいても、事務系を希望する者が4割以上となり、最も多くなっている。ただ、「有職者」と「その他」において、専門系が2割を占め、2位となっているのに対し、「学生」では、営業系が専門系よりも多く2位となっている。また、「学生」においては、製造・現場系が他のグループよりも少ない。

### (3) 現在の状況別、男女別にみた希望する職種の選択者

「学生」、「有職者」、「その他」という現在の状況それぞれにおいて男女別に希望する職種の選択者の人数と割合を算出した結果を図表9-3に示す。

「学生」では、男女ともに事務系の選択者が多いが、男性では、営業系、技術系、専門系、製造・現場系となる。女性では、2位以下は、専門系、営業系、技術系、製造・現場系となる。

「有職者」では、事務系の割合が高いが、男性では、営業系、専門系、技術系、製造・現場系となっている。女性では、専門系、営業系、技術系、製造・現場系となる。

「その他」では、事務系の割合が最も高く、男性では、営業系、専門系、技術系、製造・現場系の順になり、女性では、専門系、営業系、技術系、製造・現場系となっている。

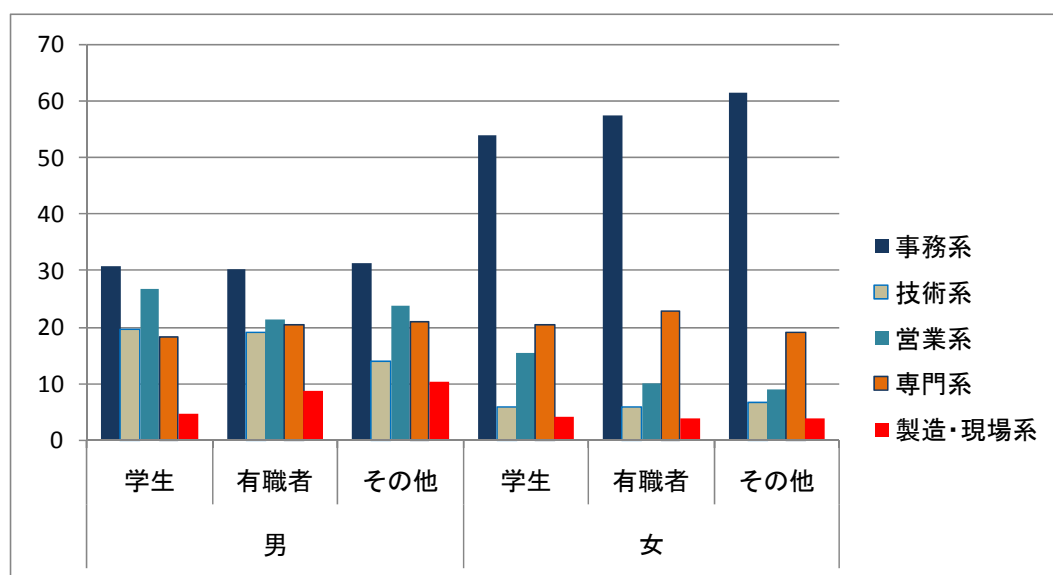
図表9-3 現在の状況、男女別にみた希望する職種の人数と割合

	学生		有職者		その他	
	男(n=153)	女(n=117)	男(n=478)	女(n=289)	男(n=1,504)	女(n=1,104)
	人数 (%)	人数 (%)	人数 (%)	人数 (%)	人数 (%)	人数 (%)
事務系	47 (30.72)	63 (53.85)	145 (30.33)	166 (57.44)	469 (31.18)	678 (61.41)
技術系	30 (19.61)	7 (5.98)	91 (19.04)	17 (5.88)	210 (13.96)	73 (6.61)
営業系	41 (26.80)	18 (15.38)	102 (21.34)	29 (10.03)	357 (23.74)	98 (8.88)
専門系	28 (18.30)	24 (20.51)	98 (20.50)	66 (22.84)	314 (20.88)	211 (19.11)
製造・現場系	7 (4.58)	5 (4.27)	42 (8.79)	11 (3.81)	154 (10.24)	44 (3.99)
合計	153 (100)	117 (100)	478 (100)	289 (100)	1,504 (100)	1,104 (100)

次に、男女別に、現在の状況別のグループ間での選択率を比較した(図表9-4)。男性に関しては、事務系の選択者はどのグループでも3割で最も多く、2位が営業系であることは共通している。男女をあわせると、「学生」では2位が営業系であるのに対して、「有職者」と「その他」の2位は専門系となったが、これは女性の選択率の影響があるために違う結果となったと考えられる。男性に限ってみると、どのグループでも2位は営業系であった。続いて「学生」の3位は技術系、4位は専門系である。それに対して、「有職者」と「その他」は3位が専門系で4位が技術系である。ただし、「学生」と「有職者」に関して、3位と4位の選択率の差は小さい。「その他」に関しては、4位の技術系の割合は他のグループと比較するとやや低くなっている。5位が製造・現場系という点はどのグループでも共通である。ただ、「その他」における製造・現場系の選択率は男性の場合、1割以上となっていて「学生」、「有職者」よりも高い割合である。「学生」は製造・現場系の選択率が特に低い。

女性に関しては、事務系の選択率がどのグループでも高く、「学生」と「有職者」で約5

割、「その他」では6割を占める。順位は、2位が専門系、3位が営業系、4位が技術系、5位が製造・現場系でどのグループも同じとなった。女性の場合、「学生」と「有職者」は事務職の希望が多いものの、営業系や専門系にも希望者がいる程度みられるが、「その他」のグループでは、事務系が圧倒的に多く、次に専門系が2割程度、その他の職種の希望が1割未満で偏った選択をしている。



図表 9-4 男女別、現在の状況別にみた希望する職種の割合(%)

### 9-3 男女別にみた能力評価と希望する職種との関連

能力評価と希望する職種との関連を検討するために、能力評価を完全に実施している者を対象として、現在の状況別、男女別に各職種の選択者数を調べた(図表 9-5)。その結果、「学生」では、サンプル全体が少ないために、製造・現場系の選択者数が10人未満となり、「有職者」の女性でも製造・現場系の選択者数が10人未満となった。このように現在の状況別、男女別、職種別の各セルのサンプルサイズが大きく異なることから、細分化したグループに関して能力の平均値を算出しても正しい解釈ができない。そこで、5つの職種別について希

図表 9-5 能力評価完全実施者における現在の状況、男女別にみた各希望職種の人数

	学生		有職者		その他	
	男	女	男	女	男	女
事務系	34	56	133	155	416	639
技術系	25	6	82	17	195	63
営業系	32	14	90	28	335	95
専門系	25	18	90	63	300	197
製造・現場系	6	5	39	9	144	41
計(n=3352)	122	99	434	272	1390	1035

望者のグループを作り、能力の8尺度に関する平均値を男女別、現在の状況別で比較することとした。初めに男女別にみた能力評価と希望する職種との関連を示す。

(1) 男性における能力評価と希望する職種との関連

男性において、希望する職種毎に能力の8つの側面の平均値と標準偏差を算出した結果を図表9-6に示す。また、能力のそれぞれの側面について、5つの職種間の平均値に差があるかどうかを分散分析によって検定した結果をF値の欄に示している。すべての能力に関して、5つの職種間での平均値は統計的に有意な差があることが示されている。

図表 9-6 男性における希望する職種毎の能力評価の平均値(mean)と標準偏差(SD)

	男性										
	事務系 (n=583)		技術系 (n=302)		営業系 (n=457)		専門系 (n=415)		製造・現場系 (n=189)		F値
	mean	SD	mean	SD	mean	SD	mean	SD	mean	SD	
リーダーシップ	2.88	(0.78)	2.84	(0.74)	3.33	(0.70)	2.98	(0.82)	2.61	(0.88)	39.05**
ボランティア&サポート	3.76	(0.70)	3.65	(0.75)	3.93	(0.66)	3.68	(0.76)	3.51	(0.79)	14.44**
プランニング	3.11	(0.84)	3.01	(0.81)	3.29	(0.81)	3.05	(0.85)	2.77	(0.90)	14.35**
スポーツ&エクササイズ	3.28	(0.81)	3.40	(0.84)	3.69	(0.77)	3.36	(0.85)	3.51	(0.83)	18.13**
リサーチ&アナライズ	3.53	(0.71)	3.37	(0.71)	3.43	(0.74)	3.37	(0.82)	3.13	(0.79)	11.06**
コンピュータ&アカウント	3.10	(0.89)	3.00	(0.87)	2.97	(0.89)	2.79	(0.84)	2.68	(0.89)	12.44**
ハンドメイキング	2.99	(0.94)	3.54	(0.90)	2.98	(0.90)	3.14	(0.95)	3.12	(0.97)	20.81**
アート&クリエイティブ	2.35	(0.88)	2.52	(0.89)	2.37	(0.88)	2.72	(0.96)	2.20	(0.88)	16.29**

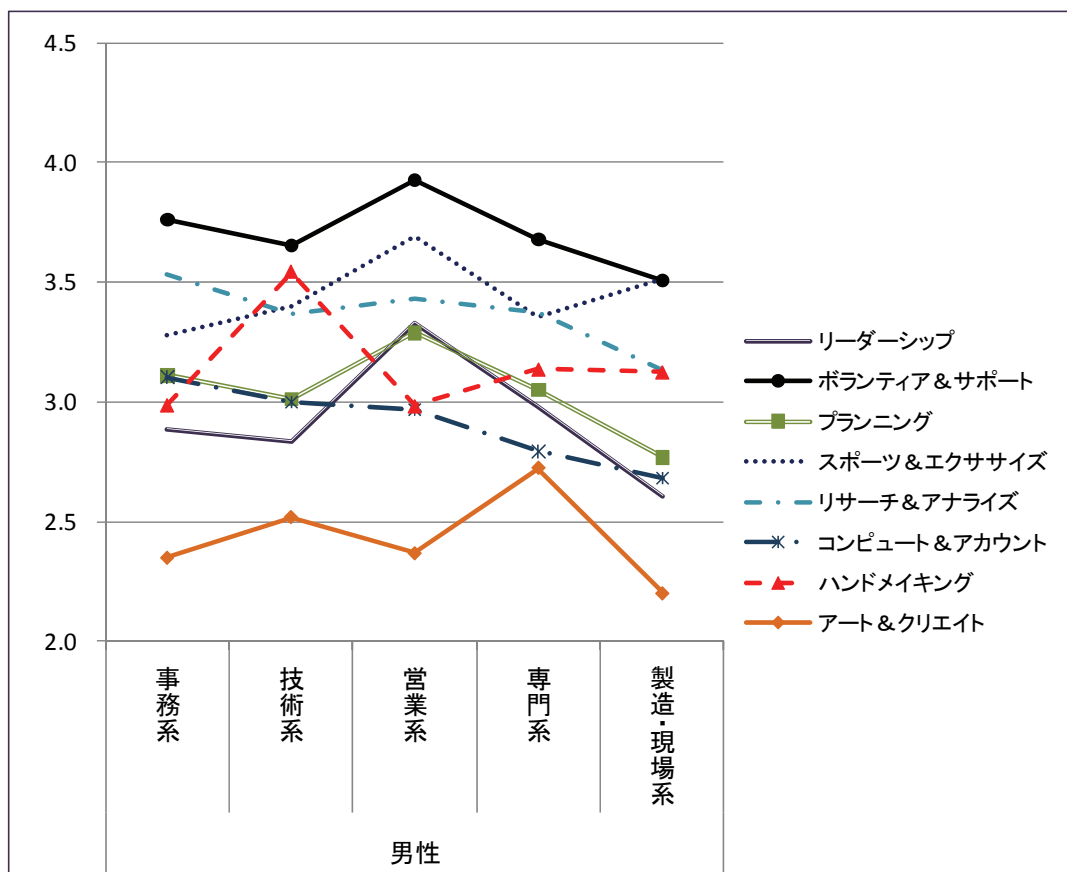
\*\*...p<.01

職種間での平均値の違いをわかりやすくするために、図表9-6の平均値をグラフにしたものが図表9-7である。図表9-7をみながら能力評価の8つの側面の平均値を順に検討する。

「リーダーシップ」は、営業系がもっとも高い。この値は統計的にも他の職種を希望した者より有意に高いことが示されている。それに続いて、専門系、事務系、技術系、製造・現場系という順になっている。専門系、事務系には差が無く、事務系、技術系には差がないが、専門系は、技術系よりも高いという統計的な有意差がある。また、最後の製造・現場系は、他のどれよりも低いということが統計的に有意である。

「ボランティア&サポート」は営業系で最も高い。これは、他の職種を選んだ者よりも統計的に有意に高いという結果となっている。続いて、事務系、専門系、技術系となり、この3つの間には差がない。最後が製造・現場系で、この職種を選んだ者の「ボランティア&サポート」の得点は統計的にみて、他の職種を選択した者よりも有意に低い。「リーダーシップ」と同じく「ボランティア&サポート」も対人系の能力である。選んだ職種毎の平均値の関係は同じ傾向を示している。

「プランニング」についても、営業系が他の職種を選んでいる者よりも高くなっている。続いて、事務系、専門系、技術系となり、この3つに関しては有意な差はみられない。最後の製造・現場系は他の職種を選んだ者よりも平均値が低くなっている。



図表 9-7 男性における希望する職種と能力評価の関連

「スポーツ&エクササイズ」においては、営業系が最も高く、他の職種を選んだ者よりも有意に高い。続いて、製造・現場系、技術系となり、この2つの間には差がない。さらに専門系、事務系と続く。技術系、専門系、事務系の間にも差がないので、製造・現場系は事務系よりも有意に高いという結果となる。

「リサーチ&アナライズ」に関しては、事務系、営業系、専門系、技術系、製造・現場系となる。事務系と営業系には統計的な差がない。また、営業系、専門系、技術系の間には差がないので、事務系は専門系、技術系よりも高いという点で有意差があるということになる。最後は製造・現場系で、これはどの職種を選んだ者よりも有意に低い値となっている。

「コンピュート&アカウント」は、事務系、技術系、営業系の順に高く、この3つは、専門系、製造・現場系よりも高いという結果になっている。専門系、製造・現場系の間には統計的な差はない。

「ハンドメイキング」は、技術系が他よりも高いという結果において、有意差がみられる。2位以下は、専門系、製造・現場系、事務系、営業系となっている。2位以下における差はみられない。

「アート&クリエイト」では、専門系が他よりも有意に高い。2番目は技術系でこれは、3位の営業系よりも高くなっている。営業系と4位の事務系との間には差はない。5位は製造・

現場系でこれは他のどれよりも低くなっている。専門系の職種を希望する者には、いろいろな職種が含まれると思うが、「アート&クリエイト」が高いという特徴をみると、研究・開発といった専門的な仕事よりは、創造的な仕事の分野を考えてこれを選んでいるものが多いことがわかる。

## (2) 女性における能力評価と希望する職種との関連

次に、女性に関して、希望する職種と能力の各側面の平均値と標準偏差をまとめたものが図表 9-8 であり、平均値に関してわかりやすくするためにグラフにしたものが図表 9-9 である。図表 9-9 をみながら、希望する職種と能力評価の平均値との関連を検討する。

図表 9-8 女性における希望する職種毎の能力評価の平均値(mean)と標準偏差(SD)

	女性										F値
	事務系 (n=850)		技術系 (n=86)		営業系 (n=137)		専門系 (n=278)		製造・現場系 (n=55)		
	mean	SD	mean	SD	mean	SD	mean	SD	mean	SD	
リーダーシップ	2.76	(0.75)	2.74	(0.78)	3.18	(0.77)	2.93	(0.75)	2.56	(0.81)	12.03**
ボランティア&サポート	3.82	(0.66)	3.67	(0.75)	4.05	(0.59)	3.82	(0.76)	3.47	(0.78)	8.42**
プランニング	3.30	(0.83)	3.32	(0.84)	3.48	(0.80)	3.40	(0.78)	2.92	(0.89)	5.38**
スポーツ&エクササイズ	3.25	(0.75)	3.37	(0.79)	3.47	(0.81)	3.33	(0.82)	3.17	(0.83)	3.06*
リサーチ&アナライズ	3.41	(0.72)	3.47	(0.77)	3.51	(0.81)	3.52	(0.78)	3.16	(0.72)	3.38**
コンピュータ&アカウント	2.74	(0.90)	2.80	(0.97)	2.59	(0.90)	2.62	(0.94)	2.40	(0.82)	3.17*
ハンドメイキング	2.64	(0.91)	3.33	(0.72)	2.69	(0.98)	2.92	(0.95)	3.00	(0.93)	15.25**
アート&クリエイト	2.71	(0.91)	3.02	(0.94)	2.84	(0.92)	3.03	(0.95)	3.01	(0.88)	8.30**

\*\*\*p<.01; \*\*p<.05

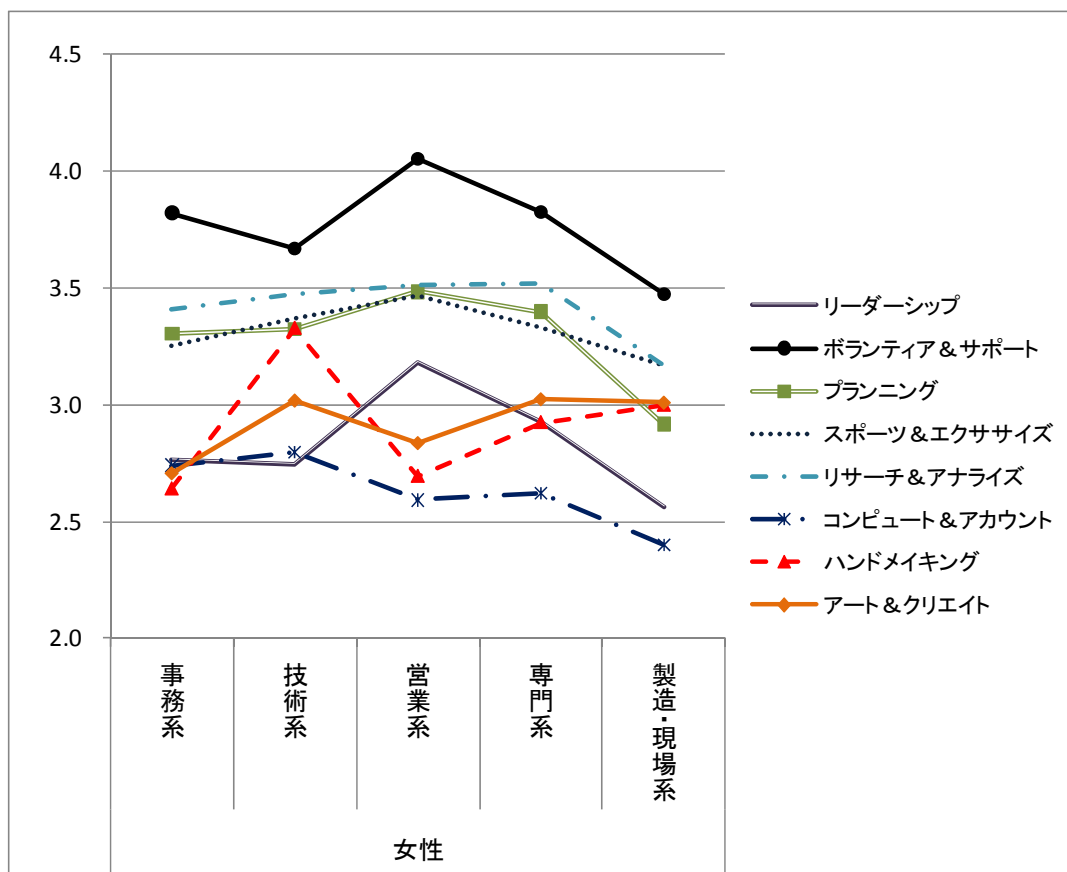
「リーダーシップ」に関しては、営業系を選んだ者の平均値が他の職種を選んだ者よりも有意に高くなっている。2 番目以下は、専門系、事務系、技術系、製造・現場系となっている。これは男性における傾向と一致している。専門系、事務系、技術系との間に有意差はなく、事務系、技術系、製造・現場系との間にも統計的な有意差はない。そこで、2 位の専門系と最後の製造・現場系の間にも、統計的な有意差があるといえる。

「ボランティア&サポート」に関しては、「リーダーシップ」と同じく、営業系が他よりも高い。2 位以下は専門系、事務系、技術系となるがこの間には有意差はない。最後の製造・現場系のみ他よりも低いという統計的な有意差が得られている。これは男性における傾向と一致している。

「プランニング」については、営業系、専門系、技術系、事務系、製造・現場系となっている。上位の 4 つの職種間では有意な差がなく、最後の製造・現場系を選んでいる人のみ、他の職種を選んでいる人よりも「プランニング」の平均値が低いという結果が得られている。

「スポーツ&エクササイズ」においては、営業系、技術系、専門系、事務系、製造・現場系の順になっている。男性では、営業系、製造・現場系、技術系、専門系、事務系の順となっていたので、傾向に違いがみられる。統計的には、1 位と 5 位との間にも有意差がみら





図表 9-9 女性における希望する職種と能力評価の関連

れた。女性の場合には、製造・現場系を選んでいるからといって、必ずしも身体を動かす作業が得意ということではないことが示されている。

「リサーチ&アナライズ」では、専門系、営業系、技術系、事務系、製造・現場系となっている。上位4つの間には有意差がなく、製造・現場系を選んでいる者だけが他よりも平均値が低いという結果となっている。男性では、事務系、営業系、専門系、技術系、製造・現場系という順位であったので、違う傾向が示されている。女性が希望する専門系の仕事は男性の場合と職種が異なる可能性があるといえる。

「コンピュート&アカウント」では、技術系、事務系、専門系、営業系、製造・現場系となった。上位4つには差がみられない。また、専門系、営業系、製造・現場系にも差がみられない。そこで、統計的な有意差は、技術系、事務系が製造・現場系よりも高いという点にみられるといえる。男性では、事務系、技術系、営業系、専門系、製造・現場系の順になっている。女性では、専門系が男性よりも高くなっており、ここでも女性の考える専門系の仕事が男性とは異なることが伺える。

「ハンドメイキング」では、技術系、製造・現場系、専門系、営業系、事務系の順となった。技術系は、他の職種を選んだ者よりも統計的な有意差を示した。製造・現場系と専門系の間には差がない。また、専門系と営業系との間、営業系と事務系との間にも差はみられな

かった。そこで、製造・現場系が事務系よりも高いという点で有意差があったといえる。男性に比べて営業系よりも事務系の順位が低い点が異なっている。

「アート&クリエイト」に関しては、専門系、技術系、製造・現場系、営業系、事務系の順となった。専門系、技術系、製造・現場系の間には差がみられなかった。また、営業系、事務系との間にも差がみられなかった。また、営業系と製造・現場系との間にも差がみられなかった。そこで、専門系、技術系は、営業系、事務系よりも有意に高いという結果になるといえる。なお、男性の場合は、専門系、技術系、営業系、事務系、製造・現場系の順である。女性と比較すると3位以下の職種で違いがみられる。

なお、上記については、男性、女性それぞれにおいて能力の側面を中心として、職種間の平均値の比較を行ったが、職種を中心として、能力の側面に順位をつけたものが図表 9-10 である。職種毎に能力の1位と2位は濃い網掛け、3位と4位には薄い網掛けをしてある。男女ともに「ボランティア&サポート」、「リサーチ&アナライズ」、「スポーツ&エクササイズ」はどの職種でも上位にあることがわかる。事務系では、これに加えて「プランニング」が男女ともに4位以内となった。技術系は、男性で「ハンドメイキング」が高く、女性では「コンピュータ&アカウント」が4位以内に入った。営業系では、男性で「リーダーシップ」が4位以内に入った。女性は「プランニング」が入った。専門系では、男性は「ハンドメイキング」が入ったが、女性では「プランニング」が4位以内となった。製造・現場系では、男性は「ハンドメイキング」が、女性では「アート&クリエイト」が4位以内に入った。

図表 9-10 職種別にみたときの男女別の能力の8側面のランキング(数字は順位)

	事務系		技術系		営業系		専門系		製造・現場系	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
リーダーシップ	7	5	7	8	4	5	6	6	7	7
ボランティア&サポート	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
プランニング	4	3	5	5	5	3	5	3	5	6
スポーツ&エクササイズ	3	4	3	3	2	4	3	4	1	2
リサーチ&アナライズ	2	2	4	2	3	2	2	2	3	3
コンピュータ&アカウント	5	6	6	4	7	8	7	8	6	8
ハンドメイキング	6	8	2	7	6	7	4	7	4	5
アート&クリエイト	8	7	8	6	8	6	8	5	8	4

#### 9-4 現在の状況別にみた能力評価と希望する職種との関連

##### (1) 「学生」における能力評価と希望する職種との関連

「学生」において、希望する職種毎に能力の8つの側面の平均値と標準偏差を算出した結果を図表 9-11 に示す。また、能力のそれぞれの側面について、5つの職種間の平均値に差があるかどうかを分散分析によって検定した結果をF値の欄に示している。8つのうち、4つの能力の側面に関しては5つの職種間で有意な差がみられたが、残りの4つに関しては統計

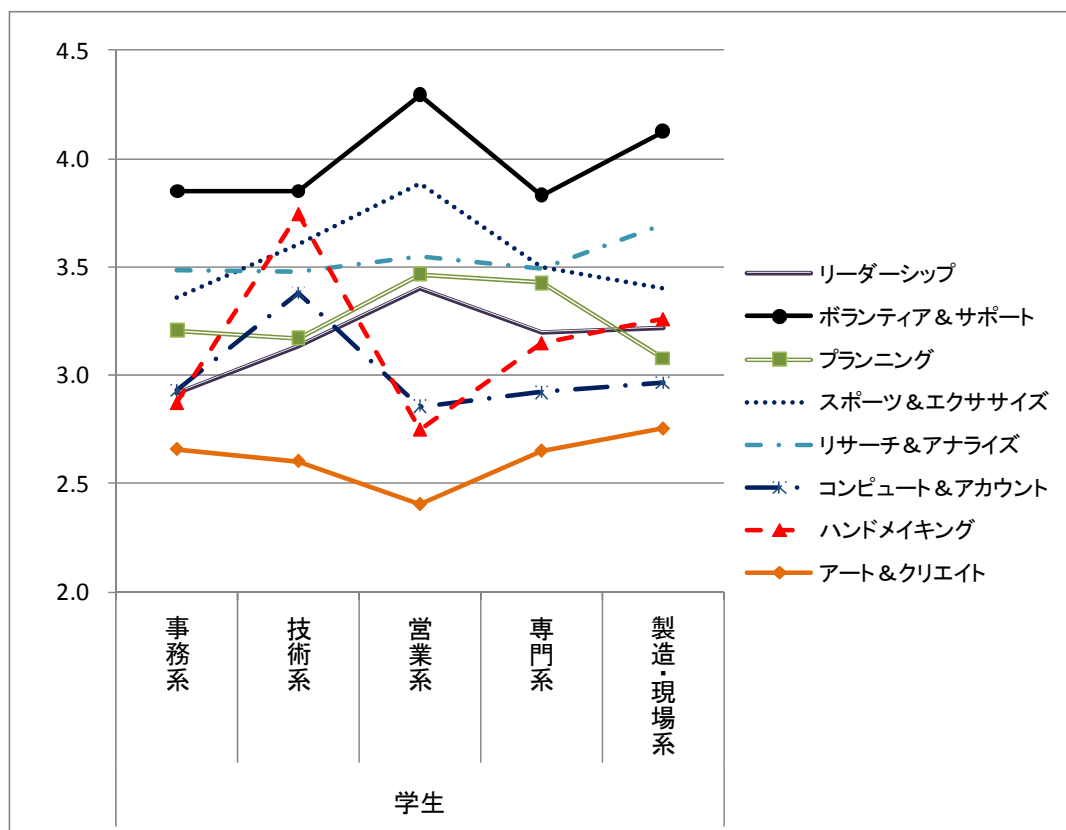
的な有意差はなかった。

「リーダーシップ」に関する平均値は、営業系、製造・現場系、専門系、技術系、事務系の順となった。営業系に関しては他の職種を選んだ者より高めの平均値となっているが、4位の技術系までの間に有意な差はなかった。1位の営業系と5位の事務系との間に統計的な有意差がみられた。男女別での平均値の検討においては、リーダーシップの平均値は男女ともに製造・現場系で一番低かったが、「学生」に限定してみると結果は異なり、営業系に続いて2番目に高い数値となった点が特徴である。

図表 9-11 「学生」における希望する職種毎の能力評価の平均値(mean)と標準偏差(SD)

	学生										F値
	事務系 (n=90)		技術系 (n=31)		営業系 (n=46)		専門系 (n=43)		製造・現場系 (n=11)		
	mean	SD	mean	SD	mean	SD	mean	SD	mean	SD	
リーダーシップ	2.92	(0.86)	3.14	(0.86)	3.40	(0.73)	3.20	(0.86)	3.22	(0.85)	2.76*
ボランティア&サポート	3.85	(0.74)	3.85	(0.60)	4.30	(0.54)	3.83	(0.83)	4.13	(0.55)	3.90**
プランニング	3.21	(0.82)	3.17	(0.92)	3.47	(0.89)	3.43	(0.98)	3.08	(0.63)	ns
スポーツ&エクササイズ	3.36	(0.77)	3.60	(0.76)	3.89	(0.82)	3.50	(0.81)	3.40	(0.94)	3.52**
リサーチ&アナライズ	3.48	(0.65)	3.48	(0.65)	3.55	(0.79)	3.49	(0.87)	3.69	(0.71)	ns
コンピュータ&アカウント	2.93	(0.95)	3.38	(0.88)	2.86	(0.99)	2.92	(0.99)	2.96	(0.95)	ns
ハンドメイキング	2.87	(0.96)	3.74	(0.90)	2.75	(1.04)	3.15	(1.02)	3.26	(1.02)	5.86**
アート&クリエイト	2.66	(0.95)	2.60	(0.89)	2.40	(0.86)	2.65	(0.98)	2.75	(0.89)	ns

\*\*\*p<.01; \*\*p<.05



図表 9-12 「学生」における希望する職種と能力評価の関連

「ボランティア&サポート」では、1位が営業系、2位が製造・現場系、3位が同じ平均値で技術系と事務系となり、最後が専門系となった。グラフで見ると営業系と製造・現場系が他よりもやや高めであることがわかる。有意差は、営業系と技術系、事務系、専門系との間にみられた。営業系と製造・現場系との間には差はなかった。製造・現場系と3位以下との間にも有意差はなかった。

「プランニング」での平均値は、営業系、専門系、事務系、技術系、製造・現場系の順となった。グラフを見ると営業系と専門系が他よりもやや高めであるが、統計的な有意差は得られなかった。

「スポーツ&エクササイズ」では、営業系、技術系、専門系、製造・現場系、事務系の順に平均値が高かった。1位の営業系と技術系との間には差が無かったが、営業系の平均値が3位以下の専門系、製造・現場系、事務系よりも高いという点で有意差がみられた。

「リサーチ&アナライズ」の平均値は、製造・現場系、営業系、専門系、事務系、技術系の順となった。製造・現場系の値が他よりもやや高めになっているが、平均値間で有意差はみられなかった。なお、この傾向は、「リサーチ&アナライズ」に関する男女別に集計した結果と大きく異なっている。

「コンピュータ&アカウント」では、技術系、製造・現場系、事務系、専門系、営業系となった。技術系の平均値が他よりも高めであるが、有意差はなかった。

「ハンドメイキング」では、技術系、製造・現場系、専門系、事務系、営業系となった。上位3位間と2位から5位間では統計的な差がなかった。そこで、1位の技術系が事務系、営業系よりも高いという点での有意差が検出されたといえる。

「アート&クリエイティブ」では、製造・現場系、事務系、専門系、技術系、営業系となった。グラフにおいては営業系が他の4つに比べて低めとなっているが有意差はみられなかった。

## (2) 「有職者」における能力評価と希望する職種との関連

「有職者」に関して、希望する職種毎に能力の8つの側面の平均値(mean)と標準偏差(SD)を算出した結果を図表9-13に示す。また、平均値をグラフにしたものが図表9-14である。

「リーダーシップ」では、営業系、専門系、製造・現場系、事務系、技術系の順で平均値が高かった。営業系の平均値が他の4つの職種に比べて有意に高かった。

「ボランティア&サポート」では、営業系、事務系、技術系、専門系、製造・現場系の順に平均値が高かった。上位の4つに関しては統計的に見て平均値に差がなかったが、製造・現場系が他よりも低いという点で有意差がみられた。

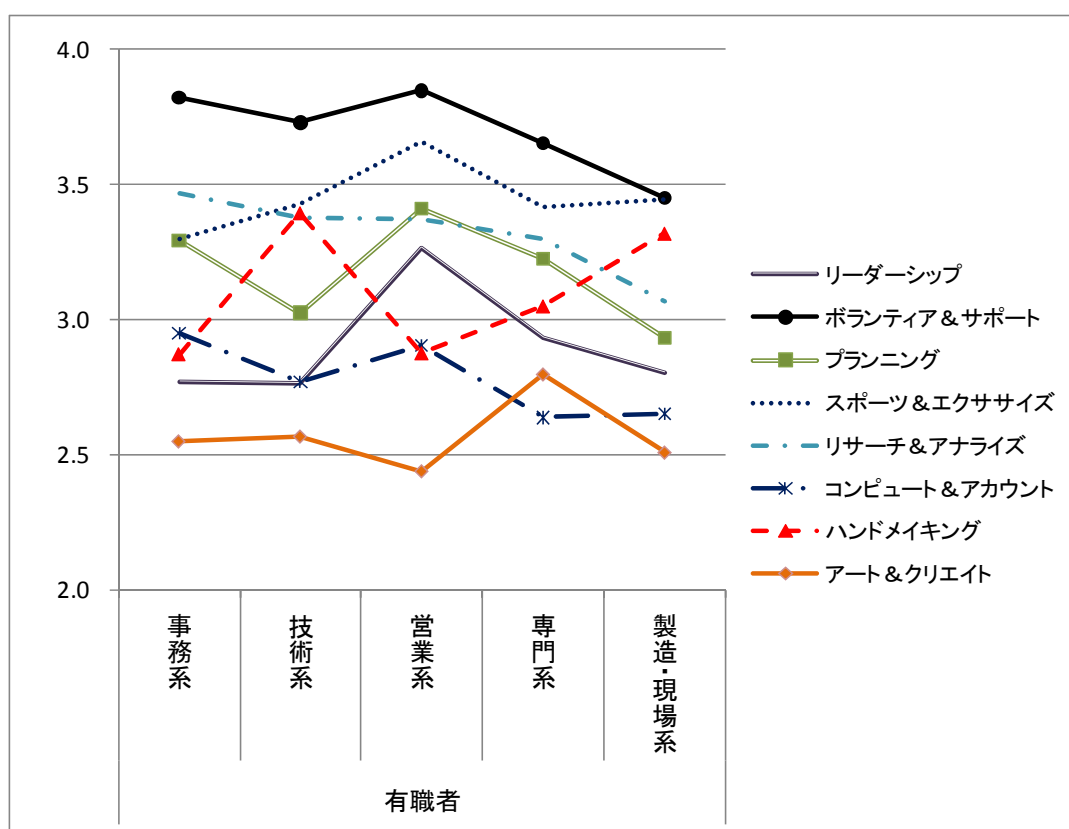
「プランニング」については、営業系、事務系、専門系、技術系、製造・現場系の順となった。上位3つおよび2位から4位、また、4位と5位の間では差がみられなかった。この結果、営業系は技術系、製造・現場系よりも高いということがわかった。

「スポーツ&エクササイズ」の平均値は、営業系、製造・現場系、技術系、専門系、事務

図表 9-13 「有職者」における希望する職種毎の能力評価の平均値 (mean) と標準偏差 (SD)

	有職者										F値
	事務系 (n=288)		技術系 (n=99)		営業系 (n=118)		専門系 (n=153)		製造・現場系 (n=48)		
	mean	SD	mean	SD	mean	SD	mean	SD	mean	SD	
リーダーシップ	2.77	(0.73)	2.76	(0.76)	3.26	(0.69)	2.93	(0.79)	2.80	(0.86)	10.13**
ボランティア&サポート	3.82	(0.68)	3.73	(0.72)	3.85	(0.69)	3.65	(0.72)	3.45	(0.66)	4.34**
プランニング	3.29	(0.83)	3.03	(0.79)	3.41	(0.75)	3.23	(0.83)	2.93	(0.89)	4.96**
スポーツ&エクササイズ	3.30	(0.73)	3.43	(0.79)	3.66	(0.75)	3.41	(0.82)	3.44	(0.78)	4.57**
リサーチ&アナライズ	3.47	(0.70)	3.38	(0.74)	3.37	(0.74)	3.30	(0.83)	3.07	(0.73)	3.51**
コンピュータ&アカウント	2.95	(0.90)	2.77	(0.87)	2.90	(0.83)	2.64	(0.94)	2.65	(0.83)	3.85**
ハンドメイキング	2.87	(0.94)	3.40	(0.87)	2.87	(0.98)	3.05	(1.04)	3.32	(0.80)	7.49**
アート&クリエイト	2.55	(0.91)	2.57	(0.98)	2.44	(0.93)	2.80	(1.06)	2.51	(1.04)	2.73*

\*\*...p<.01; \*...p<.05



図表 9-14 「有職者」における希望する職種と能力評価の関連

系の順となった。営業系が事務系よりも高いという点で有意差がみられた。

「リサーチ&アナライズ」に関しては、事務系、技術系、営業系、専門系、製造・現場系の順となった。製造・現場系を選んだ者の平均値が他の職種を希望する者に比べて低く、統計的な有意差がみられた。

「コンピュータ&アカウント」では、事務系、営業系、技術系、製造・現場系、専門系の順となった。事務系、営業系が他よりもやや高くなっているが統計的な差はみられなかった。

「ハンドメイキング」では、技術系、製造・現場系、専門系、営業系、事務系の順となっ

た。技術系、製造・現場系が他の職種よりも高く、有意差がみられた。上位2位に関しては差がなかった。下位の3位間では差がなかった。

「アート&クリエイト」では、専門系、技術系、事務系、製造・現場系、営業系の順となった。グラフをみると専門系が他に比べてやや高く、技術系、事務系製造・現場系にはあまり差がなく、営業系がやや低くなっている。専門系の平均値が営業系に比べて有意に高いという結果となった。

### (3) 「その他」における能力評価と希望する職種との関連

「その他」に関して、希望する職種毎に能力の8つの側面の平均値(mean)と標準偏差(SD)を算出した結果を図表9-15に示す。また、平均値をグラフにしたものが図表9-16である。

図表 9-15 「その他」における希望する職種毎の能力評価の平均値(mean)と標準偏差(SD)

	その他										F値
	事務系 (n=1,055)		技術系 (n=258)		営業系 (n=430)		専門系 (n=497)		製造・現場系 (n=185)		
	mean	SD	mean	SD	mean	SD	mean	SD	mean	SD	
リーダーシップ	2.82	(0.77)	2.80	(0.73)	3.29	(0.72)	2.94	(0.79)	2.51	(0.85)	45.36**
ボランティア&サポート	3.79	(0.67)	3.60	(0.77)	3.95	(0.63)	3.75	(0.77)	3.48	(0.81)	18.31**
プランニング	3.21	(0.84)	3.09	(0.83)	3.30	(0.82)	3.16	(0.83)	2.75	(0.92)	15.20**
スポーツ&エクササイズ	3.24	(0.79)	3.35	(0.85)	3.61	(0.78)	3.31	(0.84)	3.44	(0.85)	16.28**
リサーチ&アナライズ	3.46	(0.73)	3.39	(0.73)	3.46	(0.76)	3.47	(0.79)	3.12	(0.78)	8.77**
コンピュータ&アカウント	2.87	(0.91)	2.97	(0.90)	2.88	(0.91)	2.73	(0.86)	2.59	(0.89)	7.17**
ハンドメイキング	2.75	(0.93)	3.50	(0.85)	2.95	(0.90)	3.04	(0.92)	3.03	(1.00)	37.18**
アート&クリエイト	2.56	(0.91)	2.66	(0.91)	2.50	(0.91)	2.87	(0.93)	2.33	(0.91)	17.39**

\*\*...p<.01

「リーダーシップ」の平均値は、営業系、専門系、事務系、技術系、製造・現場系の順に高かった。営業系が専門系以下よりも高いという点で有意となった。また、専門系も3位以下より高くなった。事務系、技術系間には差が無く、製造・現場系は上記4つよりも有意に低くなった。

「ボランティア&サポート」では、営業系、事務系、専門系、技術系、製造・現場系の順になった。統計的な検定の結果として、営業系は2位以下の職種に比べて平均値が高かった。事務系、専門系間には差がなかった。この2つは技術系、製造・現場系よりも高かった。また、製造・現場系は、他の4つに比べて有意に低くなった。

「プランニング」については、営業系、事務系、専門系、技術系、製造・現場系の順となった。これは、「ボランティア&サポート」での順位と一致している。営業系、事務系、専門系の間には有意差はなかった。ただ、この3つは技術系、製造・現場系よりも有意に高くなっている。製造・現場系は他の4つに比べて平均値が有意に低くなった。

「スポーツ&エクササイズ」では、営業系が他の4つよりも有意に高かった。続いて、製造・現場系、技術系、専門系、事務系という順位である。2位の製造・現場系と5位の事務

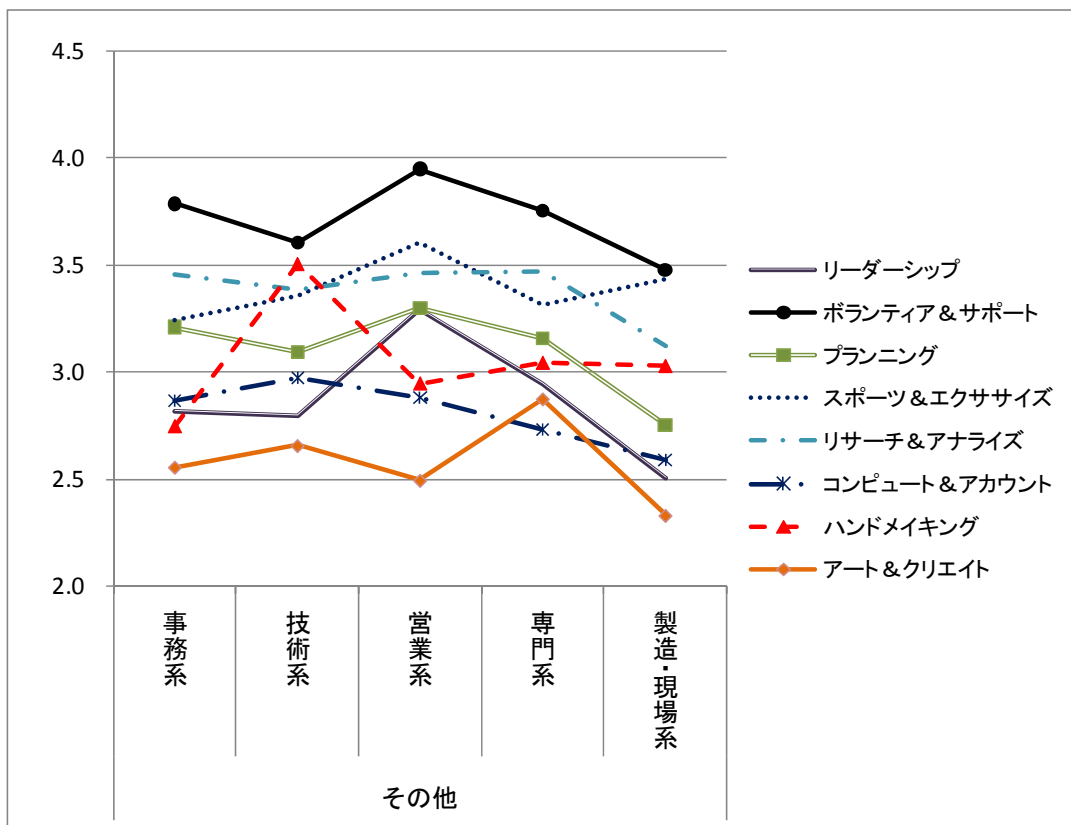
系との間に有意差がみられた。

「リサーチ&アナライズ」では、専門系、営業系、事務系、技術系、製造・現場系の順となった。上位4つの平均値はそれほど変わらず、最後の製造・現場系のみ、他より低くなった。

「コンピュータ&アカウント」では、あまり大きな違いはなかったが、順位で見ると技術系、営業系、事務系、専門系、製造・現場系の順となった。技術系と専門系以下に有意な差がみられた。製造・現場系は他よりも有意に低くなった。

「ハンドメイキング」では、技術系が他よりも有意に高かった。続いて、専門系、製造・現場系、営業系、事務系の順となった。5位の事務系は他よりも有意に低くなった。

「アート&クリエイト」では、専門系が他に比べて有意に高かった。2位以下は、技術系、事務系、営業系、製造・現場系となった。2位から4位までの間には差がみられなかった。最後の製造・現場系は他よりも平均値が低くなった。



図表 9-16 「その他」における希望する職種と能力評価の関連

最後に、職種毎に、能力の8つの側面に関して平均値の高い順に順位をつけたものが図表9-17である。1位と2位は濃い網掛け、3位と4位は薄い網掛けにした。

全体を見てみると、事務系、営業系、専門系は、「学生」、「有職者」、「その他」のいずれに関しても上位4位が、「ボランティア&サポート」、「プランニング」、「スポーツ&エクササイズ」、「リサーチ&アナライズ」で一致している。この3つの職種を選ぶ者は、「自信がある」

とする能力の側面が似ていることがわかる。他方、「技術系」、「製造・現場系」では、「ボランティア&サポート」、「スポーツ&エクササイズ」、「リサーチ&アナライズ」、「ハンドメイキング」が上位4位に入っている点で一致していた。事務系、営業系、専門系と比べると、「プランニング」が入らず、その代わりに「ハンドメイキング」が含まれる点が特徴となっている。

図表 9-17 職種別にみたときの状況別の能力の8側面のランキング(数字は順位)

	事務系			技術系			営業系			専門系			製造・現場系		
	学生	有職者	その他	学生	有職者	その他	学生	有職者	その他	学生	有職者	その他	学生	有職者	その他
リーダーシップ	6	7	6	7	7	7	5	5	5	5	6	8	5	6	7
ボランティア&サポート	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
プランニング	4	4	4	6	5	5	4	3	4	4	4	4	6	5	5
スポーツ&エクササイズ	3	3	3	3	2	4	2	2	2	2	2	3	3	2	2
リサーチ&アナライズ	2	2	2	4	4	3	3	4	3	3	3	2	2	4	3
コンピュータ&アカウント	5	5	5	5	6	6	6	6	7	7	8	7	7	7	6
ハンドメイキング	7	6	7	2	3	2	7	7	6	6	5	5	4	3	4
アート&クリエイト	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	7	6	8	8	8

## 9-5 まとめ

本章では、ユーザー登録の際に利用者に必ず選択される5つの職種（事務系、技術系、営業系、専門系、製造・現場系）と適性診断コーナーにおける能力評価の得点の関係を検討した。男女別、現在の状況別それぞれについて、職種毎に能力の8側面の平均値を算出した。

その結果、希望する職種を問わず、「ボランティア&サポート」が最も高く、「アート&クリエイト」は男女、現在の状況のどのグループで分けても低くなるという傾向は一貫していた。また、男女別でも現在の状況別でも、事務系、営業系、専門系は、自信の高い能力に関して類似する傾向がみられた。「ボランティア&サポート」、「リサーチ&アナライズ」、「スポーツ&エクササイズ」の3つは男女別でも現在の状況別でも上位4位以内に入り、これは、希望する職種にかかわらず、多くの人が比較的自信をもっている能力であるといえる。

希望する職種による違いは、大別して事務系、営業系、専門系というグループと技術系、製造・現場系というグループでの違いとしてみられるようであった。事務系、営業系、専門系のグループでは、上記の3つの能力に加えて、「プランニング」が上位に入る結果となった。それに対して、技術系、製造・現場系では、「ハンドメイキング」が多く含まれたが、その他、「コンピュータ&アカウント」（技術系、女性）や「アート&クリエイト」（製造・現場系、女性）も上位に含まれていた。

また、それぞれの能力に関する平均値の高さを5つの職種に関してランキングした結果では、その能力と関連の高い職種で順位が高くなっている傾向がみられた。例えば、「リーダーシップ」や「ボランティア&サポート」は対人系の能力であるが、営業系を希望する者が他の職種を希望する者よりも高く、どちらかという対人系の要素が低い技術系や製造・現場



系の職種を選択する者は順位が低くなっていた。また、「ハンドメイキング」はもの作りに関わる能力であるが、技術系や製造・現場系を選ぶ者の得点が高くなっていることが示された。

このことから、希望する職種と実際に測定されている能力の側面の得点には解釈可能な関連があると思われる。全体としては事務職の希望者が非常に多くなっていたが、それ以外の技術系、営業系、専門系、製造・現場系を選んでいる者に関しては、それぞれ自分が自信を持っている能力を生かすことができる、あるいは自分が自信を持っている能力を考えて希望する職種を選んでいることが示唆されているといえよう。

## 第 10 章 希望する職種と職業興味の特徴との関連

### 10-1 本章の目的

第 9 章において、希望する職種と能力評価との関連について検討し、利用者は自信をもっている能力を考慮して、希望する職種を選んでいる可能性があることが示唆された。そこで、第 10 章においては、能力と同時に利用者の個性を特徴付けるもう一つの重要な要素である職業興味と希望する職種との関連を検討する。

なお、データ分析にあたっては、希望する職種への回答と職業興味への回答が両方記録されている「回答ログ」のデータを参照し、「回答ログ」に記録が残っている者のうち、18-34 歳の対象者に絞った上で、適性診断コーナーの職業興味の尺度に完全に回答している者 3,278 名分のデータを用いた。

### 10-2 男女別にみた職業興味と希望する職種との関連

#### (1) 男性における職業興味と希望する職種との関連

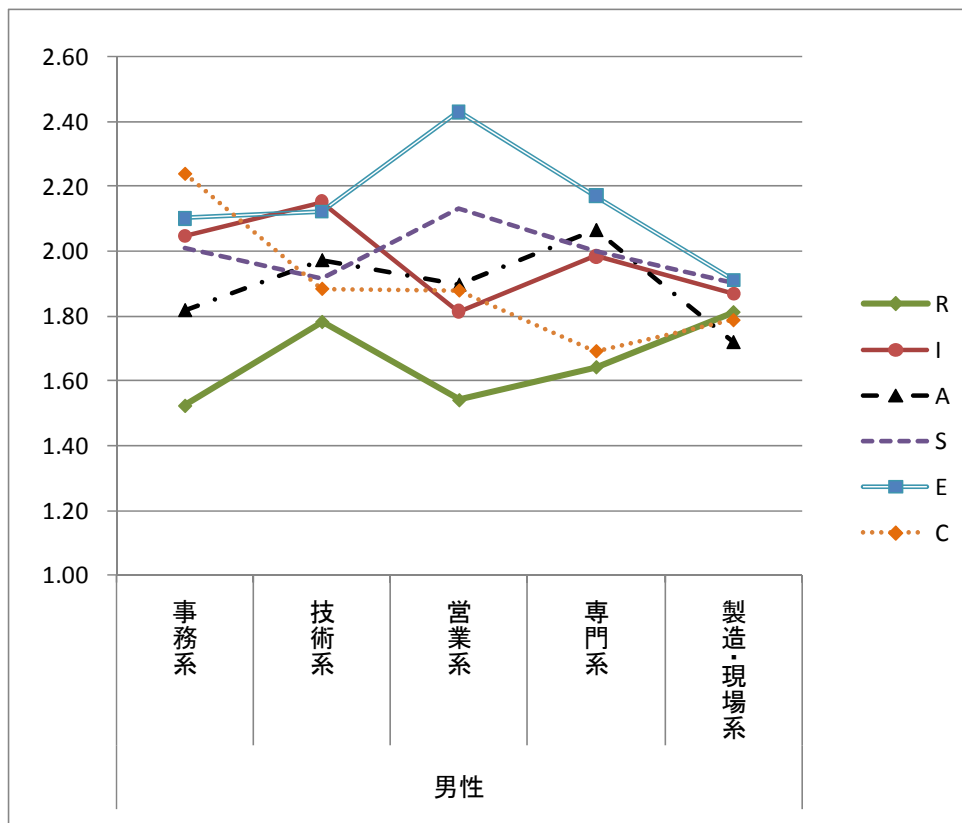
男性において、希望する職種毎に職業興味の 6 領域（R 領域、I 領域、A 領域、S 領域、E 領域、C 領域）の平均値と標準偏差を算出した結果を図表 10-1 に示す。また、興味のそれぞれの側面について、5 つの職種間の平均値に差があるかどうかを分散分析によって検定した結果を F 値の欄に示している。すべての興味領域に関して、5 つの職種間での平均値は統計的に有意な差があることが示されている。

図表 10-1 男性における希望する職種毎の職業興味評価の平均値(mean)と標準偏差(SD)

	男性										
	事務系 (n=582)		技術系 (n=297)		営業系 (n=445)		専門系 (n=407)		製造・現場系 (n=180)		F値
	mean	SD	mean	SD	mean	SD	mean	SD	mean	SD	
R	1.52	(0.53)	1.78	(0.63)	1.54	(0.54)	1.64	(0.55)	1.81	(0.59)	18.21**
I	2.05	(0.61)	2.15	(0.60)	1.81	(0.57)	1.98	(0.64)	1.87	(0.62)	17.51**
A	1.82	(0.62)	1.97	(0.61)	1.90	(0.57)	2.07	(0.60)	1.72	(0.58)	15.75**
S	2.01	(0.48)	1.91	(0.50)	2.13	(0.47)	2.00	(0.51)	1.90	(0.52)	11.98**
E	2.10	(0.55)	2.12	(0.55)	2.43	(0.50)	2.17	(0.56)	1.91	(0.63)	37.5**
C	2.24	(0.51)	1.88	(0.53)	1.88	(0.52)	1.69	(0.55)	1.79	(0.53)	76.35**

\*\*...p<.01

また、職種間での平均値の違いをわかりやすくするために、図表 10-1 の平均値をグラフにしたものが図表 10-2 である。図表 10-2 をみながら職業興味の 6 領域の平均値が職種間でどのように違うかについて順に検討する。



図表 10-2 男性における希望する職種と職業興味との関連

R 領域では、全体の平均値は職種に関わらず低めとなっているが、製造・現場系で最も高くなっている。2 位は技術系で、製造・現場系と技術系は、3 位以下の専門系よりも統計的に高くなっている。4 位は営業系、5 位は事務系である。3 位の専門系は 4 位と 5 位よりも統計的にみて有意な差がある。4 位と 5 位の間には差はみられなかった。

I 領域については、技術系が最も高く、4 位以下に比べて有意に高い。続いて、事務系、専門系は、4 位以下の製造・現場系、営業系よりも高くなっている。

A 領域については、専門系が最も高く、統計的にみて他の職種よりも平均値が高い。2 位以下は、技術系、営業系、事務系、製造・現場系となっている。2 位の技術系は事務系、製造・現場系よりも高くなっている。製造・現場系は平均値が最も低く、他のどの職種よりも統計的にみても有意に低くなっている。

S 領域については、営業系が最も高く、統計的に見て 2 位以下よりも有意に高い。営業系に続いて、事務系、専門系、技術系、製造・現場系となっている。事務系と専門系は、技術系、製造・現場系よりも平均値が有意に高くなっている。

E 領域では営業系が最も高かった。2 位から 5 位の専門系、技術系、事務系の 3 つについては差がなくほぼ同じくらいの値となった。最後の製造・現場系に関しては、他の職種の平均値に比べて有意に低くなった。

C 領域については、事務系が最も高く有意差がみられた。続いて、技術系、営業系、製造・

現場系、専門系の順となった。技術系、営業系の間には差がみられなかったが、営業系とその次の製造・現場系との間には有意な差がみられた。また、最後の専門系は、製造・現場系よりも統計的にみて低い数値となった。

## (2) 女性における職業興味と希望する職種との関連

次に、女性に関して、職種毎に興味の6領域の平均値を算出した結果を図表10-3に示す。男性と同じく、分散分析によって職種間の平均値の差を検討した結果をF値の欄に示している。すべての領域に関して職種間で有意な差がみられた。また、平均値のみを職種別にグラフにしたものが図表10-4である。

図表 10-3 女性における希望する職種毎の職業興味評価の平均値(mean)と標準偏差(SD)

	女性										
	事務系 (n=823)		技術系 (n=87)		営業系 (n=136)		専門系 (n=271)		製造・現場系 (n=50)		F値
	mean	SD	mean	SD	mean	SD	mean	SD	mean	SD	
R	1.34	(0.45)	1.62	(0.58)	1.43	(0.54)	1.41	(0.51)	1.65	(0.65)	11.02**
I	1.71	(0.61)	1.91	(0.67)	1.65	(0.61)	1.79	(0.65)	1.73	(0.65)	2.91*
A	2.03	(0.61)	2.22	(0.59)	2.15	(0.61)	2.27	(0.60)	2.23	(0.62)	9.17**
S	2.04	(0.48)	1.88	(0.44)	2.16	(0.50)	2.02	(0.51)	1.90	(0.48)	5.51**
E	2.07	(0.57)	2.08	(0.48)	2.38	(0.53)	2.17	(0.53)	1.98	(0.54)	11.14**
C	2.22	(0.54)	1.77	(0.54)	1.71	(0.48)	1.74	(0.56)	1.80	(0.51)	6.55**

\*\*…p<.01; \*…p<.05

R領域に関しては、高い順に、製造・現場系、技術系、営業系、専門系、事務系となった。製造・現場系と技術系との間に差はなかった。ただ、この2つは、3位以下のすべての職種よりも平均値が有意に高くなった。3位以下の職種間では統計的な平均値の差はみられなかった。物作りの仕事への興味と関連するR領域について、製造・現場系や技術系の職種を希望する者の平均値が高いことは傾向として一致するといえる。

I領域に関しては、技術系が最も高く、続いて、専門系、製造・現場系、事務系、営業系となった。技術系が他の職種の平均値に比べて高めで、残りはそれほど大きな差がない。統計的には、技術系が営業系よりも高いという点のみが有意となった。

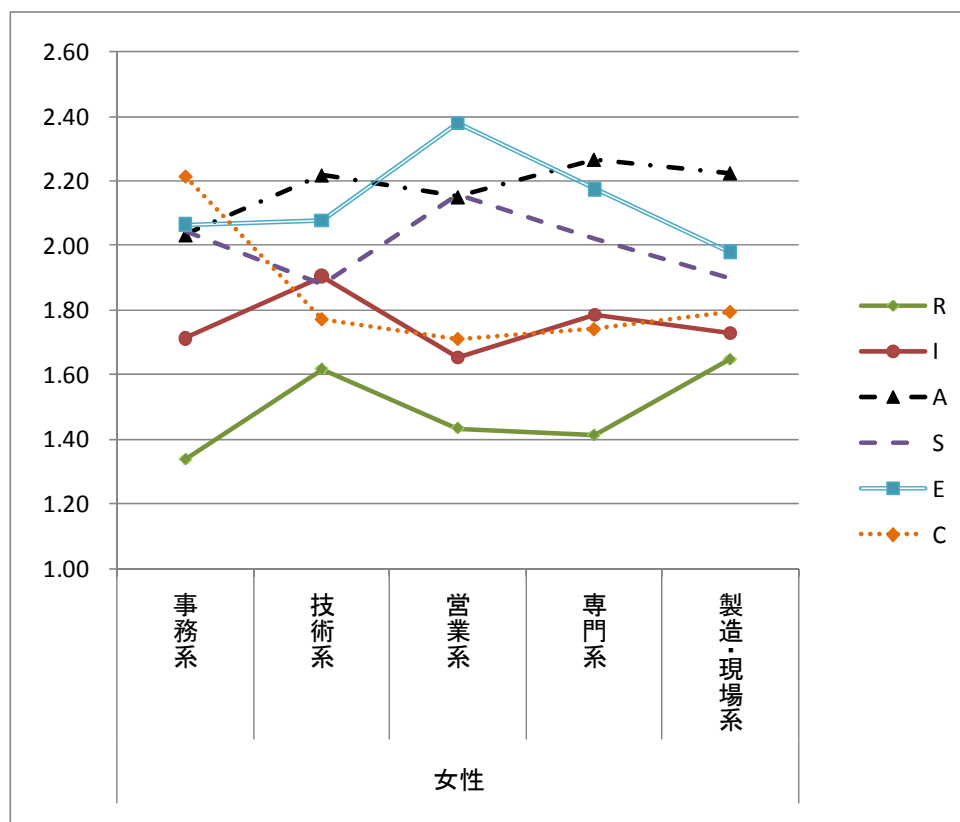
A領域では、専門系、製造・現場系、技術系、営業系、事務系となった。職種間の平均値には、それほど大きな差がみられず、専門系が事務系よりも高いという点で有意差がみられた。A領域は創造的な活動であり、興味領域としては事務系の仕事に関連するC領域とは相関が最も低い領域であるとされている。事務系の職種を希望する者のA領域の平均値が最も低かったことは、これまでの知見と一致するものである。

S領域では、営業系、事務系、専門系、製造・現場系、技術系となった。統計的にみると、上位3つの職種間では差がなく、また、2位から5位までの職種間でも差がみられなかった。

したがって、営業系が、製造・現場系と技術系よりも高いという点で有意差があったといえる。S 領域は対人系の活動に関連する職業興味であり、最も対人系の興味が必要な営業系で高かったことは、興味の特性と一致するものである。

E 領域は、営業系、専門系、技術系、事務系、製造・現場系の順となった。営業系は他のどの職種よりも平均値が有意に高かった。E 領域はまさに販売、営業活動に関連する興味領域であるので、営業系を選んだ者の得点が特に高かった点は興味と希望する職種が一致している結果であるといえる。2 位から 4 位には差がなく、3 位から 5 位にも差はなかった。そこで、2 位の専門系が 5 位の製造・現場系よりも高いという差のみ有意であるといえる。

C 領域は、事務的な活動に関連する職業興味であるが、事務系の仕事を選んだ者が他に比べて統計的に有意に高かった。2 位以下は、製造・現場系、技術系、専門系、営業系となった。2 位以下 5 位までの間には差がなかった。



図表 10-4 女性における希望する職種と職業興味との関連

次に、職種毎に、6 つの領域の平均値の高さについてランキングしたものが図表 10-5 である。1 位の領域に濃い網掛け、2 位の領域にやや濃い網掛け、3 位の領域に薄い網掛けをした。事務系では、男女ともに 1 位と 2 位は、共通に C 領域と E 領域であった。3 位に関しては男性では I 領域、女性は S 領域となった。

技術系では、男性は I 領域が 1 位、女性は A 領域が 1 位となった。2 位は、男女とも E 領

域であった。3位は、男性ではA領域、女性ではI領域となった。上位3領域に関して順位は若干異なるものの、男女ともに、I領域、A領域、E領域が高くなった。

営業系では、男女ともに1位がE領域、2位がS領域、3位がA領域となった。4位以下の順位も男女で一致していた。営業系を希望する者に関しては、職業興味の傾向が非常に明確なようである。

専門系では、男性はE領域が1位で2位がA領域、3位がS領域となった。女性の場合は、1位がA領域、2位がE領域、3位がS領域となった。順位は異なるが、専門系においても、男女で、上位3領域は共通であった。

製造・現場系では、男性はE領域が最も高く、2位がS領域、3位がI領域となった。女性では、A領域が1位、E領域が2位、S領域が3位となった。

職種に関わらず、E領域への興味は非常に高い。また、S領域やA領域の順位も高かった。

図表 10-5 職種別にみたときの男女別の興味の6領域のランキング(数字は順位)

	事務系		技術系		営業系		専門系		製造・現場系	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
R	6	6	6	6	6	6	6	6	4	6
I	3	5	1	3	5	5	4	4	3	5
A	5	4	3	1	3	3	2	1	6	1
S	4	3	4	4	2	2	3	3	2	3
E	2	2	2	2	1	1	1	2	1	2
C	1	1	5	5	4	4	5	5	5	4

### 10-3 現在の状況別にみた職業興味と希望する職種との関連

#### (1) 「学生」における職業興味と希望する職種との関連

次に、現在の状況別（「学生」、「有職者」、「その他」）に職業興味と希望する職種との関連を検討した。「学生」の場合はサンプル数が少なく、さらに希望する職種によっては、例えば「製造・現場系」のように9名しか該当しないというグループもある。そこで、集計は行ったが、統計的な検定に関しては信頼性を保証するには十分なデータであるとはいえないので、解釈の点で注意が必要である。

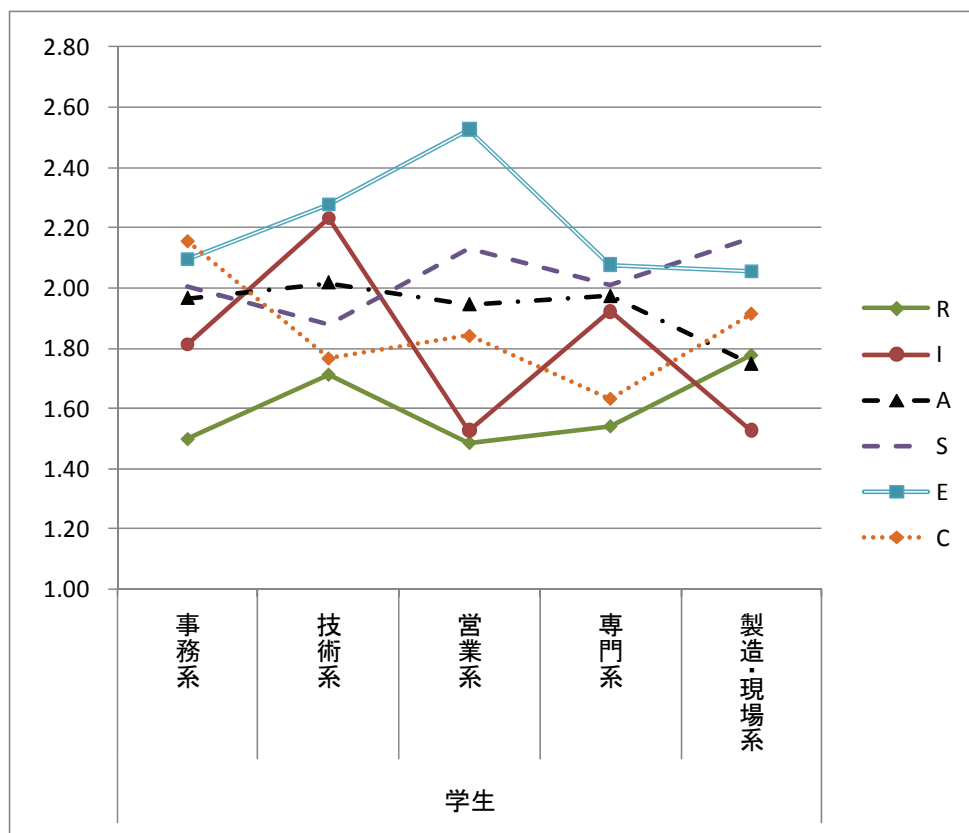
まず、「学生」に関して希望する職種毎に興味の6領域の平均値と標準偏差を算出した結果を図表10-6に示す。また、職種別の各領域の平均値をグラフにしたものを図表10-7に示す。

R領域については、製造・現場系が最も高く、続いて、技術系、専門系、事務系、営業系となった。ただ、どの職種に関しても平均値は低めであり、職種間で有意な差はみられなかった。

図表 10-6 「学生」における希望する職種毎の職業興味評価の平均値 (mean) と標準偏差 (SD)

	学生										F値
	事務系 (n=89)		技術系 (n=29)		営業系 (n=46)		専門系 (n=45)		製造・現場系 (n=9)		
	mean	SD	mean	SD	mean	SD	mean	SD	mean	SD	
R	1.50	(0.54)	1.71	(0.60)	1.49	(0.59)	1.54	(0.62)	1.78	(0.76)	ns
I	1.81	(0.63)	2.23	(0.65)	1.53	(0.49)	1.92	(0.67)	1.53	(0.49)	6.78**
A	1.97	(0.62)	2.02	(0.69)	1.95	(0.56)	1.97	(0.62)	1.75	(0.47)	ns
S	2.01	(0.49)	1.88	(0.49)	2.13	(0.47)	2.01	(0.60)	2.17	(0.47)	ns
E	2.10	(0.59)	2.28	(0.60)	2.53	(0.49)	2.08	(0.60)	2.06	(0.46)	5.31**
C	2.16	(0.54)	1.77	(0.67)	1.84	(0.54)	1.63	(0.63)	1.92	(0.67)	7.14**

\*\*...p<.01; \*...p<.05



図表 10-7 「学生」における希望する職種と職業興味との関連

I 領域については、技術系、専門系、事務系の順となり、続く製造・現場系、営業系は同じ値となった。技術系と専門系の間には差はみられなかった。また、2 位以下の職種の平均値にも差はみられなかった。そこで、技術系は、3 位の事務系以下の職種に比べて平均値が高い、という点で有意であるといえる。

A 領域の平均値は、技術系が高く、専門系と事務系は同値、次に営業系、製造・現場系の順となった。グラフでは製造・現場系の平均値は他に比べて低めに見えるが、統計的な有意差はなかった。

S 領域では、製造・現場系、営業系、専門系、事務系、技術系となった。S 領域は対人系の興味であるため、もの作りと関連する製造・現場系の得点が最も高いという点については違和感がある。製造・現場系に関してはサンプル数が9名であるため、その影響が現れている可能性もあろう。統計的な検定では、職種間の平均値に有意差はみられなかった。

E 領域では、営業系、技術系、事務系、専門系、製造・現場系となった。営業系、技術系の平均値が事務系、専門系、製造・現場系よりも高いという点が有意であった。E 領域に関しては、特徴として最も関連が強いと思われる営業系が高くでており、傾向としては一貫性がある。

C 領域では、事務系が最も高くなった。その後、製造・現場系、営業系、技術系、専門系となる。2 位に製造・現場系が入っている点が予想と異なる。事務系と専門系との間に有意な差がみられた。後の領域間では有意差はみられなかった。

## (2) 「有職者」における職業興味と希望する職種との関連

次に、「有職者」に関して希望する職種毎に興味の6領域の平均値と標準偏差を算出した結果を図表10-8に示す。また、職種別の各領域の平均値をグラフにしたものを図表10-9に示す。学生と比べてサンプル数が多いためか、すべての領域に関して、職種間での統計的な有意差が検出されている。

表 10-8 「有職者」における希望する職種毎の職業興味評価の平均値(mean)と標準偏差(SD)

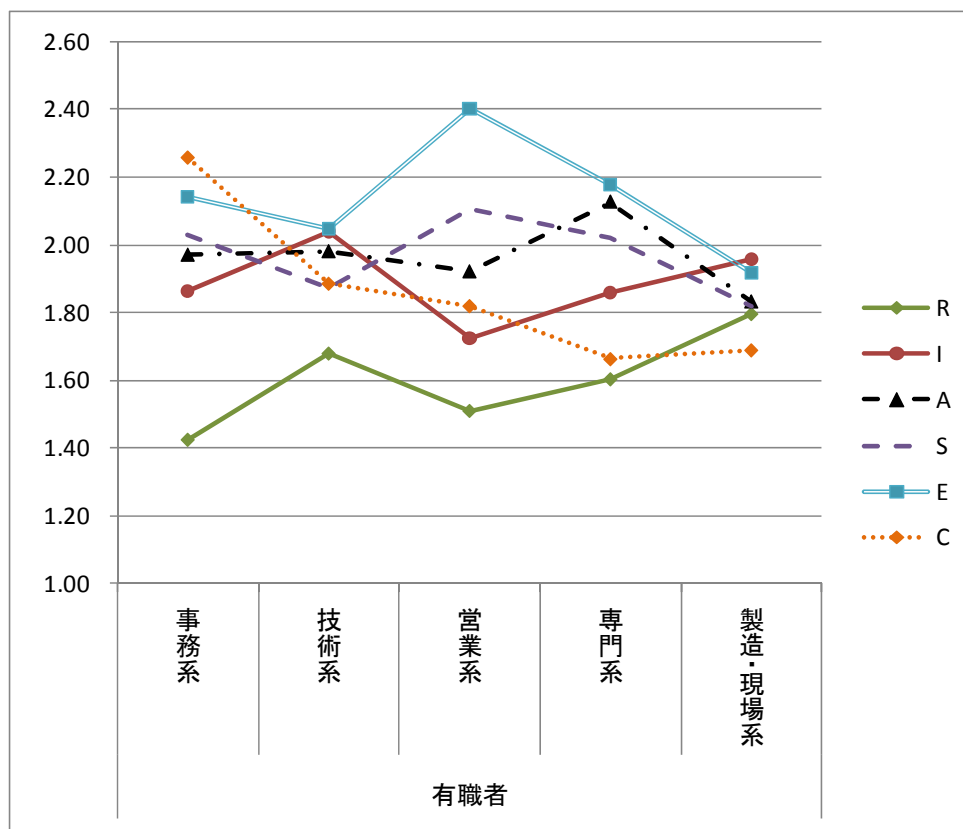
	有職者										F値
	事務系 (n=277)		技術系 (n=99)		営業系 (n=113)		専門系 (n=149)		製造・現場系 (n=46)		
	mean	SD	mean	SD	mean	SD	mean	SD	mean	SD	
R	1.42	(0.51)	1.68	(0.60)	1.51	(0.56)	1.60	(0.59)	1.80	(0.55)	7.66**
I	1.86	(0.63)	2.04	(0.58)	1.72	(0.52)	1.86	(0.70)	1.96	(0.59)	3.69**
A	1.97	(0.61)	1.98	(0.66)	1.92	(0.62)	2.13	(0.64)	1.83	(0.59)	2.93*
S	2.03	(0.48)	1.87	(0.48)	2.11	(0.47)	2.02	(0.52)	1.82	(0.53)	4.82**
E	2.14	(0.55)	2.05	(0.51)	2.40	(0.52)	2.18	(0.55)	1.92	(0.62)	8.98**
C	2.26	(0.51)	1.89	(0.50)	1.82	(0.47)	1.66	(0.55)	1.69	(0.54)	41.54**

\*\*...p<.01; \*...p<.05

R 領域については、全般に低くなっており、製造・現場系以外の職種では最も低い得点となっている。平均値を職種間で比較すると、製造・現場系が最も高く、技術系、専門系、営業系、事務系の順となった。製造・現場系と技術系の間には有意差はなかった。また、2 位から4位、3位から5位の間にも有意差はみられなかった。そこで、製造・現場系の平均値は専門系、営業系、事務系よりも高いという点で有意であるといえる。また、技術系は事務系の平均値よりも高いという点で有意となった。

I 領域については、技術系、製造・現場系、事務系と専門系(同値)、営業系の順となった。1位の技術系が5位の営業系の平均値よりも高いという点で有意差がみられた。





図表 10-9 「有職者」における希望する職種と職業興味との関連

A 領域については、専門系、技術系、事務系、営業系、製造・現場系の順となった。専門系と製造・現場系との間に有意差がみられた。専門系の平均値は他よりもやや高めであるが、残りの職種に関してはそれほど違いがみられなかった。

S 領域に関しては、営業系、事務系、専門系、技術系、製造・現場系の順となった。1 位から 3 位までに有意な差はない。また、2 位から 4 位、4 位と 5 位の間にも有意差がみられなかった。そこで、営業系は、技術系、製造・現場系よりも高いという点で有意差があるといえる。また、事務系、専門系は、製造・現場系よりも有意に高いという結果となった。S 領域は対人系の領域であるため、営業系が高く、技術系や製造・現場系が高いという結果は、これまでの職業興味領域の知見とも一致するものである。

E 領域では、営業系が他の職種よりも高いという点で有意な結果となった。続いて、専門系、事務系、技術系、製造・現場系となった。2 位から 4 位の間には差がなく、また、4 位と 5 位との間にも差がなかった。そこで、有意差は、2 位の専門系、3 位の事務系と 5 位の製造・現場系との間に検出されている。

C 領域は、事務系が他の職種の平均値に比べて有意に高くなった。C 領域は正確さを求められる定型的な作業への関心を示すので、事務系において C 領域が高いことは納得できる結果である。続いて、技術系、営業系、製造・現場系、専門系の順となった。2 位と 3 位の間には有意差はない。また、3 位から 5 位の間にも差はみられなかった。そこで、技術系が製

造・現場系、専門系よりも高いという点での有意差がみられたといえる。

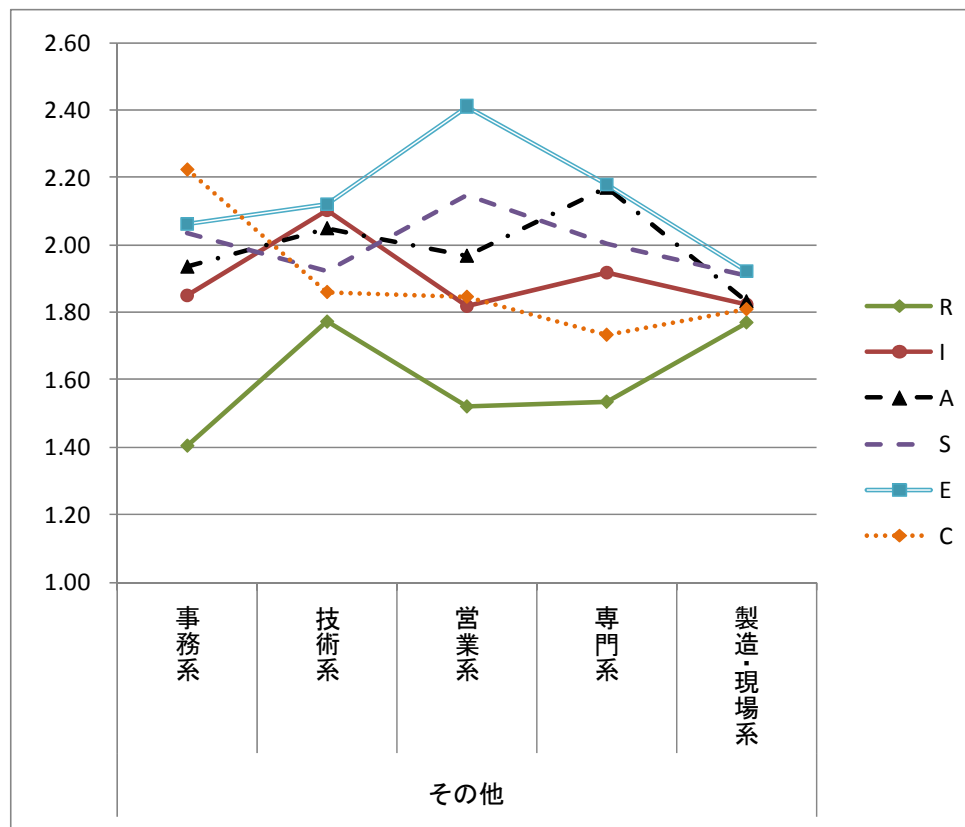
(3) 「その他」における職業興味と希望する職種との関連

最後に「その他」に関して希望する職種毎に興味の6領域の平均値と標準偏差を算出した結果を図表 10-10 に示す。また、職種別の各領域の平均値をグラフにしたものを図表 10-11 に示す。「その他」は「学生」や「有職者」と比べてサンプル数が多い。すべての領域に関して、職種間での統計的な有意差が検出されている。

図表 10-10 「その他」における希望する職種毎の職業興味評価の平均値(mean)と標準偏差(SD)

	その他										F値
	事務系 (n=1,039)		技術系 (n=256)		営業系 (n=422)		専門系 (n=484)		製造・現場系 (n=175)		
	mean	SD	mean	SD	mean	SD	mean	SD	mean	SD	
R	1.40	(0.48)	1.77	(0.63)	1.52	(0.53)	1.53	(0.52)	1.77	(0.62)	36.96**
I	1.85	(0.64)	2.10	(0.64)	1.82	(0.60)	1.92	(0.63)	1.82	(0.64)	10.35**
A	1.94	(0.62)	2.05	(0.59)	1.97	(0.59)	2.17	(0.60)	1.83	(0.64)	16.24**
S	2.03	(0.48)	1.92	(0.49)	2.15	(0.48)	2.00	(0.50)	1.91	(0.50)	12.37**
E	2.06	(0.56)	2.12	(0.54)	2.41	(0.51)	2.18	(0.54)	1.92	(0.61)	38.37**
C	2.22	(0.53)	1.86	(0.54)	1.85	(0.52)	1.73	(0.54)	1.81	(0.51)	94.99**

\*\*...p<.01



図表 10-11 「その他」における希望する職種と職業興味との関連

R 領域に関しては、どの職種においても一番平均値が低くなっている。順位をみると、技術系と製造・現場系（同値）、専門系、営業系、事務系となっている。技術系と製造・現場系には差がないが、その次の専門系以下とは有意差がある。また、専門系と営業系には差がないが、事務系とは差があり、事務系はどの職種を希望する人よりも R 領域の得点が低いことがわかった。

I 領域に関しては、技術系、専門系、事務系、製造・現場系と営業系（同値）となった。グラフを見ると技術系が高く、その他にはあまり差がみられない。統計的な検定でも技術系が他の職種を希望する者に比べて平均値が有意に高かった。

A 領域では、専門系、技術系、営業系、事務系、製造・現場系の順になった。専門系は、他の職種に比べて有意に平均値が高かった。また、製造・現場系は他の職種に比べて平均値が有意に低かった。2 位と 3 位には差がなく、3 位と 4 位間にも差がみられなかった。その結果、技術系と事務系との間に有意差があるといえる。

S 領域では、営業系の平均値が他の職種よりも高く、統計的にも有意となった。また、事務系、専門系の平均値は、技術系、製造・現場系よりも高かった。

E 領域では、営業系の平均値が他の職種に比べて有意に高かった。続いて、専門系、技術系、事務系、製造・現場系となった。製造・現場系の平均値は、他の職種に比べて有意に低かった。専門系は事務系に比べて有意に平均値が高いことがわかった。

C 領域では、事務系が他の職種に比べて統計的にも有意な高い値を示した。続いて、技術系、営業系、製造・現場系、専門系となった。2 位から 4 位間には差がなかった。また、4 位と 5 位の間にも差がなかった。そこで、技術系、営業系は、専門系よりも値が高いという点で有意であるといえる。

さらに、現在の状況に関して、職種毎に 6 つの領域の平均値の高さについてランキングしたものが図表 10-12 である。1 位の領域に濃い網掛け、2 位の領域にやや濃い網掛け、3 位の領域に薄い網掛けをした。

図表 10-12 職種別にみたときの状況別の興味の6領域のランキング(数字は順位)

	事務系			技術系			営業系			専門系			製造・現場系		
	学生	有職者	その他	学生	有職者	その他	学生	有職者	その他	学生	有職者	その他	学生	有職者	その他
R	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	4	5	6
I	5	5	5	2	2	2	5	5	5	4	4	4	6	1	4
A	4	4	4	3	3	3	3	3	3	3	2	2	5	3	3
S	3	3	3	4	5	4	2	2	2	2	3	3	1	4	2
E	2	2	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	2	1
C	1	1	1	5	4	5	4	4	4	5	5	5	3	6	5

事務系に関しては、「学生」、「有職者」、「その他」とも C 領域が 1 位、E 領域が 2 位、S 領域が 3 位と一致していた。また、その他の領域に関しても順位が一貫していた。

技術系に関しては、「学生」、「有職者」、「その他」で違いがなく、1 位が E 領域、2 位が I

領域、3位がA領域となった。事務系と比べてI領域やA領域が入っており、S領域やC領域が入っていない。

営業系では、「学生」、「有職者」、「その他」とも、1位がE領域、2位がS領域、3位がA領域で同じだった。

専門系では、1位はどの属性でもE領域であった。「学生」では2位がS領域となったが、「有職者」と「その他」では2位はA領域だった。3位は、「学生」ではA領域、「有職者」、「その他」では、S領域であった。「学生」とその他の2つで、順位は異なるが上位3領域の組み合わせは一致していた。

製造・現場系では、人数がそれぞれ少なかったためか、一貫した傾向が得られなかった。「学生」では、1位がS領域、2位がE領域、3位がC領域となった。「有職者」では、1位がI領域、2位がE領域、3位がA領域となった。「その他」では、1位がE領域、2位がS領域、3位がA領域となった。

全体として、E領域はどの職種においても順位が高くなった。平均値においてすべての職種において高かった点が反映されている。また、R領域は、製造・現場系の職種を選んだ者以外ではすべて第6位となった。C領域に関しても、事務系を選んだ者以外では、低めの順位となった。

#### 10-4 まとめ

本章では、希望する職種と職業興味に表れた特徴との関連を検討した。その結果、男女別でも現在の状況別でも希望する職種と興味との間には納得のいく関連がみられたように思われる。

例えばR領域は物作りや機械や道具を扱うことへの興味を示すが、製造・現場系を選ぶ人、技術系の職種を選ぶ人が他よりもこの領域への関心が高かった。また、I領域やA領域では専門系の仕事、技術系の仕事を選ぶ人の得点が高かった。さらに対人系のS領域やE領域に関しては、人との積極的な関わりが求められる営業系の仕事を希望する人の得点が他に比べて高くなっていた。また、C領域はいわゆるホワイトカラー事務系のような定型的な仕事に対する興味、関心を示すが、事務系の仕事を希望する人の得点が他に比べて高くなっていた。一部、「学生」ではサンプル数が少ないため、説明が難しい結果が得られていたが、上記のような傾向をみると、希望する職種は、その個人の興味の特性と一貫した傾向を示していることがわかった。

第9章の能力との関連についてみても同様の傾向がみられたことから、職種の希望を回答する場合には、利用者は自らの能力や興味を考慮して決めていることが示唆された。

## 第 11 章 「希望する職業タイプ」、「望ましい働き方」と価値観評価との関連

### 11-1 本章の目的

価値観評価においては、「希望する職業タイプ」として「民間企業（大手）」、「民間企業（中小）」、「公務員・教員」、「自営等その他」という 4 つのタイプを用意して、自分が希望している職業のタイプを 1 つだけ選択される。また、「望ましい働き方」としては、「一つの会社でできるだけ長く働きたい」、「状況に応じて転職するなど、複数の会社を経験したい」、「自営するか独立したい」、「働く必要がなくなったら仕事を辞めたい」、「就職しないでアルバイトやパートで働きたい」という 5 つの選択肢を用意し、利用者は 1 つを選ぶ。

本章では、「希望する職業タイプ」と「望ましい働き方」に関して、価値観評価の利用者がどのような回答をしているのかという点を分析するとともに、価値観評価における「就職するときに重視する 21 個の条件」に関する回答結果との関連を検討することを目的とする。扱っているデータは、価値観評価を完全に実施した 18-34 歳までの 2,861 名のデータを使った。

### 11-2 「希望する職業タイプ」の選択結果

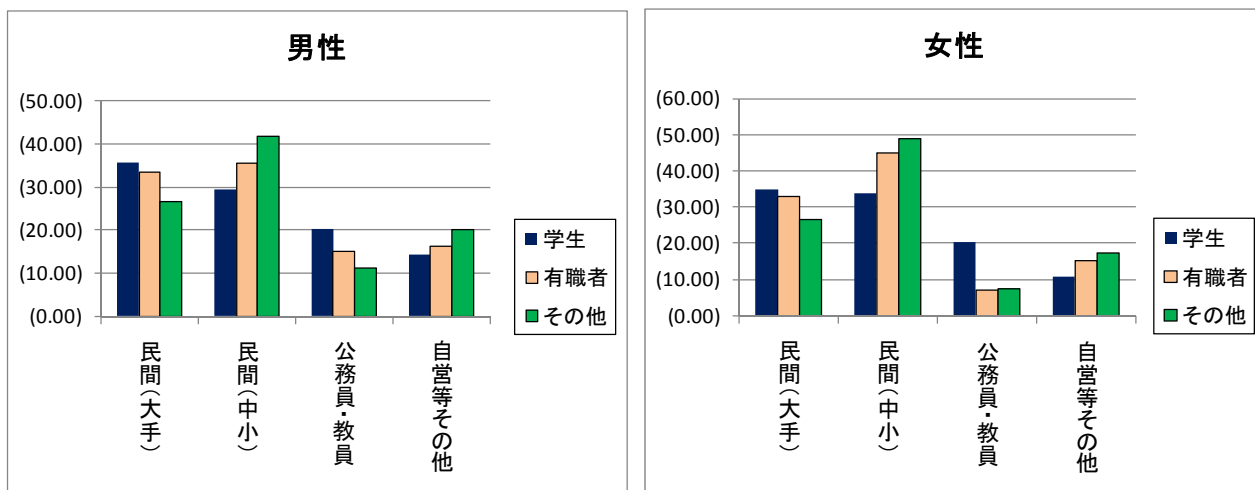
価値観評価については、性別や現在の状況による回答傾向の違いが大きいため、男女別、現在の状況別に集計を行った。「希望する職業タイプ」に関する選択者の人数と割合を示した者が図表 11-1 である。また、回答傾向をわかりやすく示すため、選択率を男女別、現在の状況別にグラフとした結果を図表 11-2 に示す。

図表 11-1 「希望する職業タイプ」に関する選択傾向

男性データ	学生(n=98)	有職者(n=372)	その他(n=1211)
項目	人数 (%)	人数 (%)	人数 (%)
民間(大手)	35 (35.71)	124 (33.33)	323 (26.67)
民間(中小)	29 (29.59)	132 (35.48)	506 (41.78)
公務員・教員	20 (20.41)	56 (15.05)	137 (11.31)
自営等その他	14 (14.29)	60 (16.13)	245 (20.23)

女性データ	学生(n=83)	有職者(n=226)	その他(n=871)
項目	人数 (%)	人数 (%)	人数 (%)
民間(大手)	29 (34.94)	74 (32.74)	230 (26.41)
民間(中小)	28 (33.73)	102 (45.13)	425 (48.79)
公務員・教員	17 (20.48)	16 (7.08)	65 (7.46)
自営等その他	9 (10.84)	34 (15.04)	151 (17.34)



図表 11-2 男女別、現在の状況別に見た「希望する職業のタイプ」の選択率(%)

全体として、男性も女性も「民間（中小）」の選択率が高く、その次が「民間（大手）」となっている。「自営等その他」と「公務員・教員」にはあまり違いがないが、特に女性に関しては、「自営等その他」の方が「公務員・教員」よりも選択率が高い。

男性と女性を比較すると、「民間（大手）」の希望者は男女ともに「学生」、「有職者」、「その他」とも傾向に差がない。「学生」が最も多く、次に「有職者」、最後が「その他」となっている。「民間（中小）」に関しても男性、女性ともに「その他」が最も高く、「有職者」が次で「学生」が最も低い。ただ、割合をみると、男性に比べて女性の方がどのグループにおいても「民間（中小）」を選択している者が多くなっている。「公務員・教員」については、男女ともに「学生」では約2割で同程度である。「有職者」と「その他」については、男性では15-10%程度が希望しているが、女性では10%未満で少なくなっている。「自営等その他」では、男女ともに傾向は同じであり、「その他」が最も高く、「有職者」がその次で、「学生」が最も低い。男性の方が女性よりもどのグループに関しても選択率が高くなっており、「自営等その他」の希望は男性の方が多いたことが示されている。

### 11-3 「望ましい働き方」の選択結果

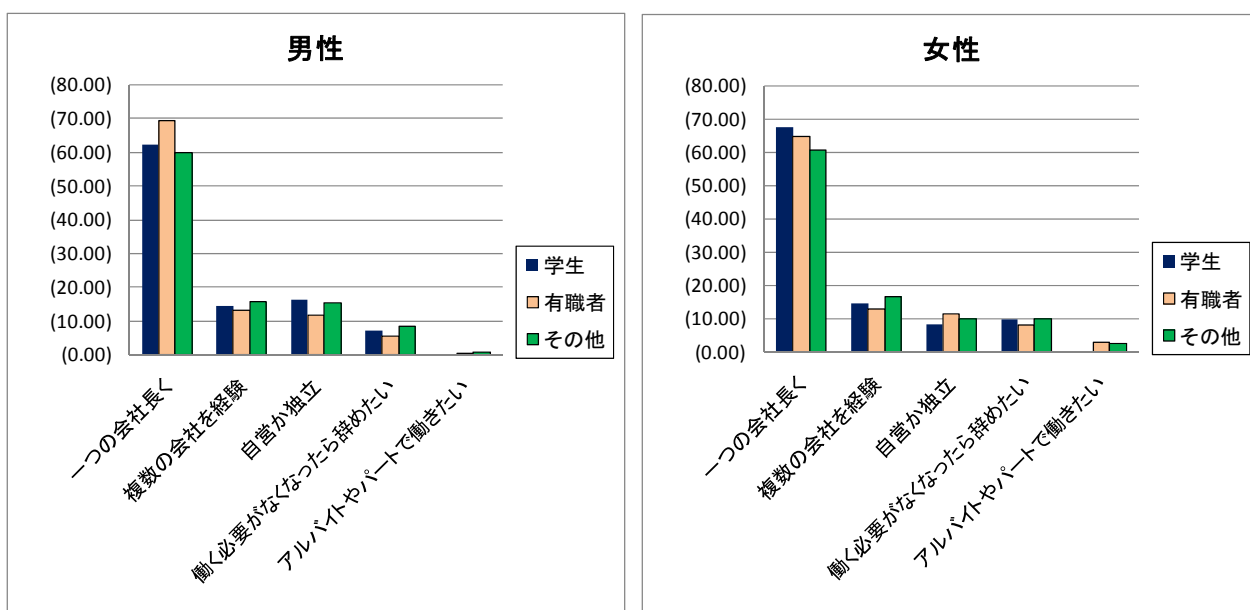
「望ましい働き方」として用意した5つの選択肢に関して、男女別、現在の状況別にグループとして分けたとき、各グループでどのような選択がなされたのかを集計した結果を図表11-3にまとめた。また、選択率を男女別、現在の状況別にグラフとして表示した結果を図表11-4に示した。

全体としてみると、「望ましい働き方」の5つの選択肢のうち、「一つの会社でできるだけ長く働きたい」という回答者が男女ともに最も多くなっている。残りの4つの選択肢についてはほぼ同じような選択の状況となっていた。

図表 11-3 「望ましい働き方」に関する選択傾向

男性データ	学生(n=98)	有職者(n=372)	その他(n=1211)
項目	人数 (%)	人数 (%)	人数 (%)
一つの会社でできるだけ長く働きたい	61 (62.24)	258 (69.35)	724 (59.79)
状況に応じて転職するなど、複数の会社を経験したい	14 (14.29)	49 (13.17)	189 (15.61)
自営するか独立したい	16 (16.33)	43 (11.56)	185 (15.28)
働く必要がなくなったら仕事を辞めたい	7 (7.14)	21 (5.65)	102 (8.42)
就職しないでアルバイトやパートで働きたい	0 (0.00)	1 (0.27)	11 (0.91)

女性データ	学生(n=83)	有職者(n=226)	その他(n=871)
項目	人数 (%)	人数 (%)	人数 (%)
一つの会社でできるだけ長く働きたい	56 (67.47)	146 (64.60)	528 (60.62)
状況に応じて転職するなど、複数の会社を経験したい	12 (14.46)	29 (12.83)	145 (16.65)
自営するか独立したい	7 (8.43)	26 (11.50)	87 (9.99)
働く必要がなくなったら仕事を辞めたい	8 (9.64)	18 (7.96)	88 (10.10)
就職しないでアルバイトやパートで働きたい	0 (0.00)	7 (3.10)	23 (2.64)



図表 11-4 男女別、現在の状況別に見た「望ましい働き方」の選択率(%)

「一つの会社でできるだけ長く働きたい」という項目では、男性データでは、「有職者」、「学生」、「その他」の順で高かったが、女性では「学生」、「有職者」、「その他」の順となった。それぞれのグループの6割が「一つの会社でできるだけ長く働きたい」という項目を選んでいった。

「状況に応じて転職するなど、複数の会社を経験したい」では、男性も女性も「その他」、「学生」、「有職者」の順となった。「自営するか独立したい」という項目では、男性の方が女性よりも選択率が高くなっていった。男性では、「学生」、「その他」、「有職者」という順となった。女性では、「有職者」、「その他」、「学生」となった。「働く必要がなくなったら仕事を辞

めたい」という項目では、男性に比べて女性の選択率が高くなっていた。選択の割合の順位は男女ともに同じで、「その他」、「学生」、「有職者」の順となっていた。「就職しないでアルバイトやパートで働きたい」という選択肢を選んだ者はほとんどいなかったが、女性の方が男性に比べてやや多かった。男女ともに「その他」が多く、次が「有職者」で「学生」では一人もいなかった。

#### 11-4 「希望する職業タイプ」と価値観評価との関連

価値観評価では、仕事を選択する時に考える必要のある 21 個の条件を提示し、それについての重視度を 5 段階で評価させているが、21 個の条件は、「仕事重視」、「会社重視」、「環境重視」の 3 つの因子に分けることができる（第 7 章参照）。

ここでは、男女別に「希望する職業タイプ」として、選択したタイプ別に 3 つの因子の平均値（mean）と標準偏差（SD）を算出した。男性データに関して計算した結果を図表 11-5 に示す。また平均値に関して見やすくするためにグラフにしたものが図表 11-6 である。

「民間（大手）」を選んでいる人は、「会社重視」と「環境重視」の平均値がほぼ同じくらいに高く、「仕事重視」の平均値が低い。

「民間（中小）」を選んでいる人は、「環境重視」の平均値が最も高い。次が「会社重視」で「仕事重視」は最も低い。

「公務員・教員」を選んでいる人は、「環境重視」の平均値が最も高い。次が「会社重視」で「仕事重視」が最も低い。

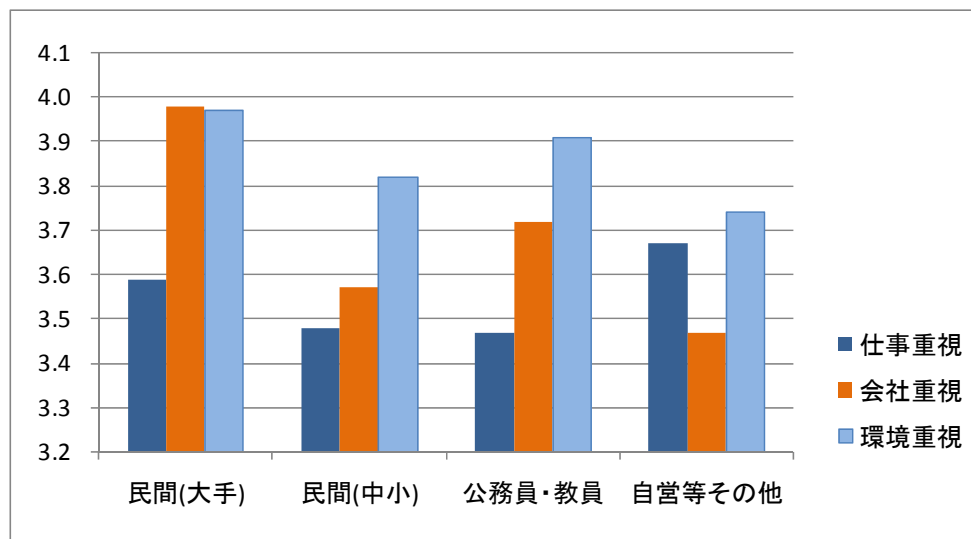
「自営等その他」を選んでいる人は、「環境重視」の平均値が最も高く、次が「仕事重視」で最も低いのが「会社重視」である。

この結果をみると「民間（大手）」を選んでいる人は、「環境」と「会社」という 2 つの要素のどちらも重視しているが、4 つのタイプの中では最も「会社重視」の傾向が強い。それに対して、「自営等その他」を選んでいる人は、「環境重視」の得点が高いものの、4 つのタイプの中では「環境重視」の重視度が低く、反対に最も「仕事重視」であるといえる。「環境重視」の傾向が強いのは「公務員・教員」であり、「会社」についても重視しているが、「仕事重視」の得点は 4 つのタイプの中で最も低い。「民間（中小）」を希望する人たちは、「環境重視」が最も高く、「仕事重視」が低いという点では「公務員・教員」と同様であるが、「会社重視」の項目が「公務員・教員」よりも低くなっている。このように 4 つのタイプと「仕事重視」、「会社重視」、「環境重視」との関連をみると、選んでいる職業タイプと価値観との間にある関連性には納得できる部分があり、希望する職業タイプによって職業選択の時に重視している条件がその職業タイプの持っている特徴に対応しているようである。



図表 11-5 「希望する職業タイプ」別の価値観評価に関する平均値と標準偏差(男性)

男性データ	民間(大手)(n=482)		民間(中小)(n=667)		公務員・教員(n=213)		自営等その他(n=319)	
	mean	(SD)	mean	(SD)	mean	(SD)	mean	(SD)
仕事重視	3.59	(0.46)	3.48	(0.44)	3.47	(0.48)	3.67	(0.46)
会社重視	3.98	(0.52)	3.57	(0.53)	3.72	(0.54)	3.47	(0.59)
環境重視	3.97	(0.53)	3.82	(0.57)	3.91	(0.51)	3.74	(0.61)



図表 11-6 「希望する職業タイプ」別にみた価値観の3因子の平均値(男性)

次に、女性のデータに関して同様に平均値と標準偏差を求めた。計算結果を図表 11-7 にグラフを図表 11-8 に示す。

女性の場合は、男性に比べてどのタイプにおいても「環境重視」の平均値が高くなっている。4つのタイプで見ると、「民間(大手)」が最も高く、「民間(中小)」と「公務員・教員」は同程度、最も低いのが「自営等その他」であった。

「会社重視」に関しては、「民間(大手)」が最も高く、次に「公務員・教員」、「民間(中小)」となり、「自営等その他」は最も低くなった。この傾向は男性と一致している。

「仕事重視」では、「自営等その他」が最も高く、「民間(大手)」、「公務員・教員」、「民間(中小)」となっている。「公務員・教員」と「民間(中小)」の間にはほとんど差がなく、男性と同じような傾向である。

職業タイプ別に見ていくと、「民間(大手)」では、「環境重視」が最も高く、「会社重視」、「仕事重視」となった。男性では、「環境重視」と「会社重視」がほぼ同じくらい高いのに対して、女性では「環境重視」の方がはっきりと高くなっている。

「民間(中小)」では、「環境重視」、「会社重視」、「仕事重視」となった。男性に比べて「環境重視」が高くなっていることがわかる。

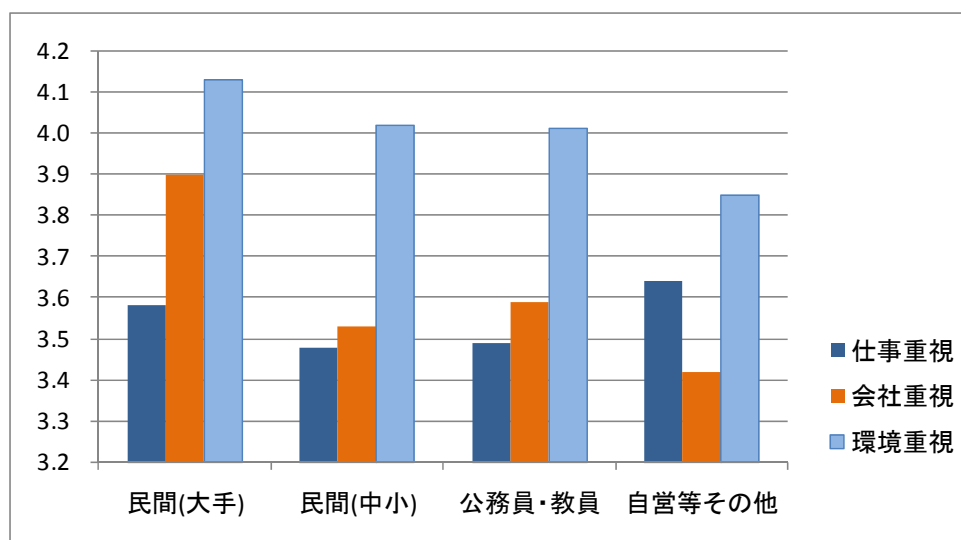
「公務員・教員」では、「環境重視」が最も高く、「会社重視」、「仕事重視」となった。得点の傾向は「民間(中小)」の選択者と同程度である。男性と比べて、「会社重視」の平均値

が低めとなっている。

「自営等その他」では、「環境重視」が高く、次が「仕事重視」で、最後が「会社重視」となっている。この傾向は男性と一致している。ただ「環境重視」の得点が男性よりも高めとなっている。

図表 11-7 「希望する職業タイプ」別の価値観評価に関する平均値と標準偏差(女性)

女性データ	民間(大手)(n=333)		民間(中小)(n=555)		公務員・教員(n=98)		自営等その他(n=194)	
	mean	(SD)	mean	(SD)	mean	(SD)	mean	(SD)
仕事重視	3.58	(0.45)	3.48	(0.43)	3.49	(0.48)	3.64	(0.43)
会社重視	3.9	(0.54)	3.53	(0.48)	3.59	(0.51)	3.42	(0.62)
環境重視	4.13	(0.50)	4.02	(0.51)	4.01	(0.60)	3.85	(0.52)



図表 11-8 「希望する職業タイプ」別にみた価値観の3因子の平均値(女性)

以上、男女別に「希望する職業タイプ」と価値観の3因子の得点との関係を見たが、選択している「職業タイプ」と因子の得点間との関係は男性も女性も同じような傾向がみられた。ただ、男性に比べて女性では「環境重視」の得点が全般に高くなっていた。

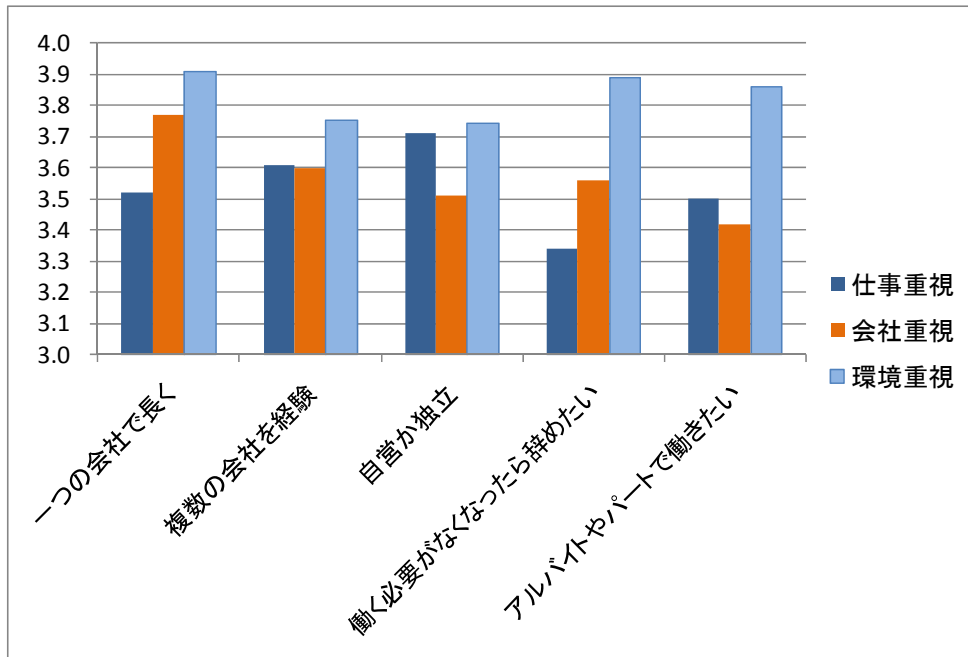
### 11-5 「望ましい働き方」と価値観評価との関連

次に、「望ましい働き方」についても男女別に価値観の3つの因子ごとに平均値と標準偏差を計算した。男性に関するデータを図表 11-9、グラフを図表 11-10 に示す。

全体の傾向として「一つの会社でできるだけ長く働きたい」という選択肢を選んだ人が男性の場合 1043 名おり、他方、「就職しないでアルバイトやパートで働きたい」を選んだ者が 12 名ということで、各グループのサンプル数が大きく異なっている。そこで、平均値に関しても偏りがある可能性を考慮にいれながらも、各グループの平均値をみていきたい。

図表 11-9 「望ましい働き方」別の価値観評価に関する平均値と標準偏差(男性)

男性データ	一つの会社でできるだけ長く働きたい(n=1043)	状況に応じて転職するなど、複数の会社を経験したい(n=252)	自営するか独立したい(n=244)	働く必要がなくなったら仕事を辞めたい(n=130)	就職しないでアルバイトやパートで働きたい(n=12)
	mean (SD)	mean (SD)	mean (SD)	mean (SD)	mean (SD)
仕事重視	3.52 (0.46)	3.61 (0.44)	3.71 (0.44)	3.34 (0.49)	3.50 (0.35)
会社重視	3.77 (0.55)	3.60 (0.59)	3.51 (0.60)	3.56 (0.62)	3.42 (0.49)
環境重視	3.91 (0.55)	3.75 (0.62)	3.74 (0.55)	3.89 (0.55)	3.86 (0.37)



図表 11-10 「望ましい働き方」別にみた価値観の3因子の平均値(男性)

「一つの会社でできるだけ長く働きたい」という場合には、「環境重視」が最も高く、続いて、「会社重視」、「仕事重視」となった。このグループでは、他と比べて「会社重視」の得点が最も高くなっている点が特徴である。

「状況に応じて転職するなど、複数の会社を経験したい」を選択したグループでは、「環境重視」が最も高く、「仕事重視」、「会社重視」は同程度となっている。「仕事重視」の得点は、「一つの会社でできるだけ長く働きたい」よりも高くなっていて、より仕事志向であることが示されている。

「自営するか独立したい」を選んだ者は、「環境重視」、「仕事重視」で、この2つはほぼ同じくらい重視されている。最も得点が低くなったのが「会社重視」の因子である。このグループは、5つの中で最も「仕事重視」の得点が高い。

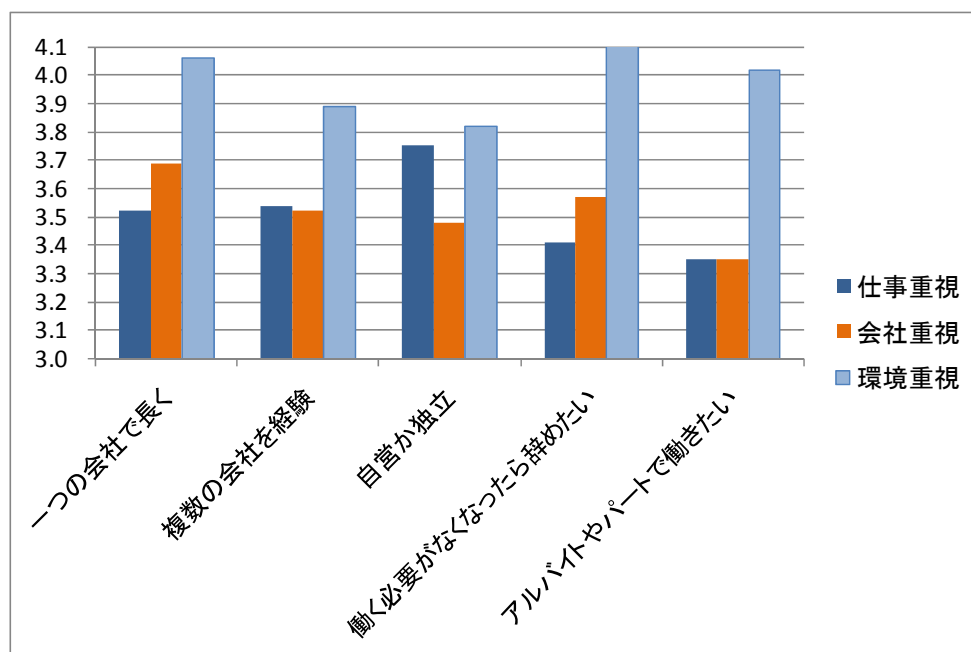
「働く必要がなくなったら仕事を辞めたい」を選んだ者は、「環境重視」の得点が「一つの会社でできるだけ長く働きたい」に次いで、高くなっている。次に高かったのは「会社重視」、最後が「仕事重視」で、「仕事重視」の得点は、他のどのグループよりも最も低くなっている。

「就職しないでアルバイトやパートで働きたい」を選んだ者は、「環境重視」の得点が一番高くなっている。その次に「仕事重視」であり、「会社重視」が最後となっている。非正規の仕事を志向しているので、他のグループと比べて「会社重視」の因子の得点が最も低くなっている。

次に女性に関して、「望ましい働き方」で選択された働き方別に価値観の3因子に関する平均値と標準偏差を算出した（図表 11-11）。また、平均値に関してグラフにしたものが図表 11-12 である。

図表 11-11 「望ましい働き方」別の価値観評価に関する平均値と標準偏差(女性)

女性データ	一つの会社でできるだけ長く働きたい(n=730)	状況に応じて転職するなど、複数の会社を経験したい(n=186)	自営するか独立したい(n=120)	働く必要がなくなったら仕事を辞めたい(n=114)	就職しないでアルバイトやパートで働きたい(n=30)
	mean (SD)	mean (SD)	mean (SD)	mean (SD)	mean (SD)
仕事重視	3.52 (0.44)	3.54 (0.40)	3.75 (0.42)	3.41 (0.50)	3.35 (0.60)
会社重視	3.69 (0.53)	3.52 (0.53)	3.48 (0.60)	3.57 (0.60)	3.35 (0.59)
環境重視	4.06 (0.50)	3.89 (0.52)	3.82 (0.55)	4.15 (0.54)	4.02 (0.66)



図表 11-12 「望ましい働き方」別にみた価値観の3因子の平均値(女性)

女性の場合にも「一つの会社でできるだけ長く働きたい」という者が多く、730名がこの選択肢を選んでいる。他方、最も少なかったのは「就職しないでアルバイトやパートで働きたい」という者で30名であった。

3つの因子の平均値をみていくと、「一つの会社でできるだけ長く働きたい」という選択肢を選んだ者については、「環境重視」が高く、続いて「会社重視」、「仕事重視」となった。「環

「環境重視」の平均値は他のグループと比べても高めであり、「働く必要がなくなったら辞めたい」という回答を選んでいるグループに次いで2番目の高さとなっている。

「状況に応じて転職するなど複数の会社を経験したい」という選択肢を選んだ者は、「環境重視」が高くなっているが、「仕事重視」と「会社重視」がほぼ同程度である。「環境重視」の得点は5つのグループでは下から2番目で、女性としては重視度が低いようである。他方、「仕事重視」は5グループ内では上から2番目に高くなっている。

「自営するか独立したい」という選択肢を選んだ者は、「環境重視」が高いが、それと同程度に「仕事重視」の得点が高く、5つのグループの中で最も「仕事重視」である。また、「環境重視」は5つのグループの中で最も低い。「会社重視」は5つのグループの中で「アルバイトやパートで働きたい」というグループに次いで下から2番目に低くなっている。

「働く必要がなくなったら仕事を辞めたい」という選択肢を選んだ者は、「環境重視」の得点が最も高い。これは他のグループと比較しても一番高くなっている。続いて「会社重視」の因子の得点が高く、これは5つのグループの中で、「一つの会社でできるだけ長く働きたい」という項目を選んだ者に続いて2番目に高い。また、「仕事重視」は他のグループと比較して下から2番目となり、低めになっている。

「就職しないでアルバイトやパートで働きたい」という選択肢を選んだ者は、「環境重視」が一番高く、「仕事重視」と「会社重視」が低くなっている。「仕事重視」と「会社重視」の得点は、5つのグループの中でどちらも一番低い値となっている。

以上、男女別に「望ましい働き方」と価値観の3因子の得点との関係を見たが、男性に比べて女性の方がどの「働き方」でも「環境重視」の得点が高くなっているとはいえ、選択している「働き方」と因子の得点間に関しては男性、女性に関わらず同様の傾向がみられた。すなわち、「仕事重視」の傾向が強いのは、「自営するか独立したい」というグループで、その次には「複数の会社を経験したい」というグループとなる。また、「会社重視」の傾向が強いのは、「一つの会社でできるだけ長く働きたい」というグループであった。「環境重視」については、「一つの会社でできるだけ長く働きたい」、「働く必要がなくなったら仕事を辞めたい」、「就職しないでアルバイトやパートで働きたい」というグループは、「自営するか独立したい」、「複数の会社を経験したい」というグループよりもその傾向が強くなっていることがわかった。

「望ましい働き方」に関しては、特に男性において、グループ間のサンプル数が偏っていたため、妥当な結果が得られるかどうか懸念されたが、選ばれている選択肢と価値観の3因子のそれぞれの特徴との関連には解釈可能な関係があるように思われた。

## 11-6 まとめ

本章では、価値観評価に関連して回答があった「希望する職業タイプ」と「望ましい働き

方」についての選択傾向と価値観評価に関して得られた3つの因子間の関連について検討した。

その結果、「希望する職業タイプ」に関しても、「望ましい働き方」に関しても価値観に関する3つの因子のもつ特徴と説明可能な関連がみられた。女性の方が男性に比べてどの選択肢を選んでいても「環境重視」の得点が高いという結果とはなったが、他の因子との関係については、男女とも同様の傾向がみられた。

「希望する職業タイプ」に関しては、どのグループでも「環境重視」の因子に関する重視度は高かったが、4つのグループ間で比較してみると、「仕事重視」の特徴が高いのは、「自営等その他」の職業タイプを選んでいるグループであること、「会社重視」に関しては、「民間（大手）」を選んでいるグループであること、「環境重視」に関しては、「公務員や教員」を選んでいるグループの重視度が高いことが明らかになった。

他方、「望ましい働き方」に関しては、働き方に関する5つのグループのどれにおいても「環境重視」の得点は高くなっていたが、グループ間で比較してみると、「仕事重視」の傾向が強いのは「自営するか独立したい」という回答を選んでいるグループ、「会社重視」の得点が高いのは「一つの会社でできるだけ長く働きたい」を選んでいるグループ、「環境重視」に関しては、「自営するか独立したい」や「複数の会社を経験したい」というグループよりも、「働く必要がなくなったら仕事を辞めたい」、「就職しないでアルバイトやパートで働きたい」、「一つの会社でできるだけ長く働きたい」というグループの方で得点が高いことが示された。

## 総括 得られた知見と今後の課題

本書は、キャリア・インサイト D 版が設置されている施設を通して収集された 2007 年 9 月から 2009 年 10 月までのデータを使って、システムの利用状況および利用者の適性評価に関する特徴について分析した結果をまとめたものである。

### 1. 第 I 部のまとめ

第 I 部では、どのような人がシステムを使っているのかという利用者の属性に関する検討を行うとともに、システムの利用方法等について検討した。その結果、この期間におけるシステムの総利用者の数は 7,678 名で、全体の利用者のうち、新規利用者数が 3,869 名で 50.4%、再利用者数は 1,284 名で 16.7%、記録なしの者は 2,475 名で 32.2%を占めることがわかった。

総利用者のうち、操作ログにおいてログインしてログアウトの記録がない者、施設の担当者やシステム導入の作業にあたっている業者が試行として使っていると判断される記録、再利用の記録は集計対象からはずした。また、キャリア・インサイトの対象年齢は 18 歳から 34 歳であるが、施設によっては中学生や 35 歳以上の求職者の利用もあった。そこで、利用者の人数は 13 歳から 65 歳にしぼり、それ以外の年齢が書き込まれている利用者のデータは集計から除いた。その結果、総計は 6,212 名となった。

分析対象となった 6,212 名のうち利用者の属性をみると、システムが設置されている機関には若年者向けの相談施設が多いことを反映し、年代としては、25-29 歳が 2,181 名で最も多く、次に 21-24 歳が 1,719 名で、この 2 つの年齢階級を合わせると 3,900 名となり全体の 62.8%を占めていた。性別では、「男性」が 3,369 名、「女性」が 2,843 名と男性の方が多かった。現在の状況別では、「学生」が 599 名、「有職者」が 1,192 名、「その他」が 4,421 名で、「その他」の割合が全体の 71.2%を占めていることがわかった。

利用方法に関しては、回答記録を残した者のうち、18-34 歳のデータに絞って分析したところ、3,645 名のデータが対象となった。適性評価に関しては、能力、興味、価値観、行動特性という 4 つのテストをすべて実施した者の割合は 73.2%で、約 7 割以上が適性診断コーナーにある 4 つのテストを 1 回の利用時に使っていることがわかった。一人あたりの平均利用時間は 38.53 分であった。

### 2. 第 II 部のまとめ

第 II 部においては、適性診断コーナーに用意されている能力、興味、価値観、行動特性の 4 つの検査に関して、利用者の男女別と現在の状況別で各尺度を構成しているそれぞれの因子に関して平均値を求めた。適性評価に関するこれまでの研究においては、能力や興味に関

しては性差が大きく検出される場所であるが、本書で扱っているキャリア・インサイトのデータに関しても能力や興味に関してみられた性差は、従来、得られている研究の知見と一致するものであった。また、現在の状況としては「学生」、「有職者」、「その他」という3つの状況のいずれかに該当するかを利用者が選ぶことになるが、「学生」は「有職者」および「その他」と回答傾向がやや異なるようであった。「学生」のデータは特に「その他」に比べてサンプル数が少なかったため、その影響が生じている可能性もある。

### 3. 第Ⅲ部のまとめ

第Ⅲ部では、利用者がユーザー登録の際に選択している5つの職種「事務系」、「技術系」、「営業系」、「専門系」、「製造・現場系」という職種の選択と能力、興味に関する回答結果との関連を検討した。それぞれの職種には、必要とされる能力や特に関連する興味の領域がある。利用者自身が自分についての適性面での特徴を考慮して、最初に希望する職種を選んでいるのかということを検討したいと考えた。

利用者全体では「事務系」の職種を選択している者が非常に多かった。また、男性が比較的に様々な職種を希望しているのに対し、女性では、希望する職種に偏りがみられた。ただ、能力や興味についての利用者自身の回答結果と希望する職種との関連をみた結果においては、利用者は適性を全く考慮せず職種を選んでいるということではなく、自分の能力や興味の特徴を生かせる職種を選択しているという傾向が示唆されていた。

また、価値観に関しては、利用者は価値観評価において「希望する職業のタイプ」を4つの選択肢の中から1つ選び、あわせて「望ましい働き方」を5つの選択肢の中から1つ選ぶ。そこで、それぞれ利用者が選んでいる職業のタイプと望ましい働き方に関して、価値観項目の3つの因子である「仕事重視」、「会社重視」、「環境重視」という変数との関連を検討した。その結果、男性も女性も「環境重視」という因子への重視度は高いものの、「希望する職業のタイプ」や「望ましい働き方」との関連をみると、選択されている職業のタイプや働き方に関して、それぞれがもつ特徴と関連の高い因子の得点が高くなっている傾向が確認された。

上記のような結果を踏まえると、キャリア・インサイトでは適性評価に関する様々な変数が測定されているが、利用者の回答には、従来の適性研究で得られている知見と一致する傾向がみられ、また、複数の変数間での回答の整合性もあることがわかった。これは、利用者が各検査に対して誠実に回答していることを裏付けるとともに、利用者自身がシステムを使って実際に適性評価を受ける前の段階においても、自分の得意なことや好きなことを考えて仕事を選び、また、自らの価値観にそった働き方等を希望していることを示していると思われる。

キャリア・インサイトは利用者自身がパソコンで自ら使うシステムであり、施設によってはどんな来所者でも自由に利用できるような環境において用いられている場合も含まれるた



め、利用者の回答の信頼性がどの程度まで保証されているのかという点についての懸念があった。しかしながら、今回分析した結果においては、適性評価に関する利用者の回答は非常に明確であり、信頼できるものであるという結論を導くことができると考えられる。

なお、相談担当者にとっては、本データで示されたような希望する職種と能力や興味との一般的な関連について知識をもっておくことは、希望する職種とは全く異なるタイプの適性を示すような利用者に対して相談を行う際に有用である。希望する職種と本人の適性が異なっている場合に、適性の傾向とより一致するのはどのような職種なのかということを考えたり、本人の意向を確認したりすることができるからである。

#### 4. 今後の課題

本書の冒頭でも述べたように、キャリア・インサイトには、適性評価という心理検査の部分が機能として組み込まれているため、年数が経つとともに信頼性が保証されているかを検証する必要がある。D版は尺度の信頼性を検証するために必要な基礎データを経常的に収集できるという大きなメリットをもつシステムである。そこで、今後、システムの見直しを行う必要が起こったときには、D版で収集されたデータを活用して尺度の精度を確認していきたい。

また、D版では、同じ尺度を使って同じような属性をもつデータを長期間収集することができるため、今回分析したデータを数年後に収集されるデータと比較するようなことも可能である。年月とともに社会の中での雇用環境が変化するとともに、若年者の適性の傾向が変化するかという点についても検討することができるだろう。

本書の執筆にあたっては適性評価を中心として限られた変数を扱い、分析も基礎的な集計に留めたが、キャリア・インサイトD版にはここに取り上げた以外にも様々な変数が組み込まれている。今後、そういった他の変数についても分析を行い、若年求職者の適性を中心とした個性、価値観、職業選択への考え方をいろいろな角度から検討していくことが今後の課題である。

## 引用文献

- Harris, J. 1974 The computer: Guidance tool of the future. *Journal of Counseling Psychology*, 21, 4, 331-339.
- Harris-Bowlsbey, J.A. 1991 The respective roles of the counselor and the computer in the career development process. (室山晴美訳 1992 「キャリア発達過程におけるカウンセラーとコンピュータの役割」 *進路指導研究*, 13, 35-40.)
- Holland, J.L. 1992 *Making Vocational Choices*. 2<sup>nd</sup>, ed. A theory of vocational personalities and work environments. Psychological Assessment Resources, Inc.
- Katz, M.R. 1988 Computerized guidance and the structure of occupational information. (室山晴美・柳井晴夫・仙崎武 共訳 「コンピュータ利用のガイダンスと進路指導」, *進路指導研究*, 1990, 11, 46-52.)
- 松本真作 1992 米国のキャリア・ガイダンスのためのコンピュータシステム 「コンピュータによるキャリア・ガイダンス・システムの現状と展望」 *日本労働研究機構資料シリーズ*, No.19, 3-19.
- 松本真作・松本純平 1991 CHOICES: カナダ雇用移民省の適職探索システム—その機能と現状— *日本労働研究機構研究紀要*, NO.1, 73-88.
- 松本純平・室山晴美 2008 CACGs の運用と利用方法の検討 —「キャリア・インサイト D 版」の利用記録の分析を通して— *労働政策研究・研修機構 ディスカッションペーパー*
- 室山晴美 1997a 自己の職業興味の理解が職業情報の検索に及ぼす効果 *日本労働研究機構研究紀要* No.13, 1-15.
- 室山晴美 1997b 自己の職業興味の理解と進路に対する準備度が職業情報の検索に及ぼす効果 *進路指導研究* No.18, 1, 17-26.
- 室山晴美 1998 「コンピュータと進路指導」 *日本労働研究機構資料シリーズ*, No.76, 44-57.
- 室山晴美 1999 若年者のための職業能力評価尺度の作成 *日本労働研究機構研究紀要*, No.17, 105-114.
- 室山晴美・折谷妙子・松本純平・宮崎利行 2001 VPI 職業興味検査の改訂に関する研究 *日本労働研究機構研究紀要*, No.22, 1-25.
- 室山晴美 2002 コンピュータによる職業適性診断システムの利用と評価 *教育心理学研究* 50, 311-322.
- 室山晴美 2006 キャリア・インサイトによる個性理解 *雇用問題研究会*
- 労働政策研究・研修機構 2007 「中学生、高校生の職業レディネスの発達—職業レディネス・テスト標準化調査の分析を通して—」 *労働政策研究報告書* No.87.
- Super, D.E. & Bohn, M.J. Jr. 1970 "Occupational Psychology", Wadsworth Pub. Co.

- 柳井晴夫・前川眞一・室山晴美 1991 アメリカにおけるコンピュータ利用のキャリアガイ  
ダンスシステムについて 月刊進路ジャーナル, No.352, 14-17. 実務教育出版
- Watts,A.G. 1978 Using computers in careers guidance in schools. *Journal of Occupational  
Psychology*, 51, 29-40.
- Watts,A.G. 1993 The politics and economics of Computer-Aided Careers Guidance Systems.  
*British Journal of Guidance & Counseling*, 21, 2, 175-188.

---

JILPT 資料シリーズ No.73

若年求職者の適性評価－キャリア・インサイトの利用記録を用いて－

発行年月日 2010年6月25日

編集・発行 独立行政法人 労働政策研究・研修機構

〒177-8502 東京都練馬区上石神井 4-8-23

(照会先) 研究調整部研究調整課 TEL: 03-5991-5104

印刷・製本 有限会社 太平印刷

---

©2010 JILPT

\* 資料シリーズ全文はホームページで提供しております。(URL:<http://www.jil.go.jp/>)